２０１１年度　修士論文

国際スポーツイベントのレガシーに関する研究：２００９台湾・高雄ワールドゲームズを事例に

A Study of International Sport Event’s Legacy:
The Case of 2009 Kaohsiung World Games

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻　スポーツビジネス研究領域

５０１０Ａ０９５－１

李 芝菁
Chih Ching Lee

研究指導教員：　原田　宗彦　教授

目次

第一章　緒言 3
　第一節　研究の背景および動機 3
　第二節　問題意識 8
　第三節　研究目的 8
第二章　先行研究 9
　第一節　国際スポーツイベントが地域にもたらす影響 9
　第二節　レガシーといった概念の検討 13
　第三節　2009 高雄ワールドゲームズに関して 15
　第四節　先行研究のまとめ 19
第三章　研究方法 21
　第一節　質的研究法の応用 21
　第二節　専門家インタビュー 22
　第三節　研究のプロセスおよび調査概要 23
　第四節　SCAT 分析法 27
第四章　研究の結果および考察 30
　第一節　2009WG レガシーの具体的構成要素 30
　　（1）施設 30
　　（2）知識・ノウハウ 32
　　（3）人的資源 34
　　（4）政策・制度 36
　　（5）スピリット 38
　　（6）国際的認知・印象 40
　第二節　レガシーの存続における課題 42
　　（1）施設 42
　　（2）知識・ノウハウ 45
　　（3）人的資源 47
　　（4）政策・制度 48
　　（5）スピリット 49
　　（6）国際的認知・印象 50
　第三節　ポストイベント戦略 51
　　（1）施設 51
　　（2）知識・ノウハウ 53
　　（3）人的資源 54
　　（4）政策・制度 55
　　（5）スピリット 56
　　（6）国際的認知・印象 57
　第四節　考察 60
第五章　研究の限界と課題 69
　第一節　一般化に関する課題 69
　第二節　インタビュイー構成の課題 70
　第三節　調査手法における課題 70
　第四節　まとめ・今後の可能性 71
参考文献 72
付録①　インタビューガイド

第一章　緒言

第一節　研究の背景および動機

1980 年代まで、大型国際スポーツイベントの多くは「国の事業」として扱われ、ほとんどは収益が望まれない状況で開催されていた。そういった大型国際スポーツイベントが初めて商業化し、黒字と成功を収めたのは 1985 年のロサンゼルス・オリンピックであり、以来、「ロサンゼルス・モデル」と呼ばれる運営方式は国際スポーツイベントを誘致・開催する世界各地の都市の指針になっていた（Hall,　1992）。イベント自体の収益以外、現代のスポーツイベントには、「経済効果」や「都市開発」といった新しいキーワードが付随している。すなわちイベントによって都市の知名度を高め、多くのスポーツツーリストを呼び込んで消費を活性化し、スタジアムやアリーナの建設によって都市インフラを整備する「カタリスト」としての効果が期待される（原田、2002）。イベントの誘致・開催に立ち上がる都市が次々と現れ、スポーツイベントが国家・地域にもたらす効果（インパクト）に関する研究も多く行われるようになってきたのである。それらの効果は様々な側面から分析されている（表 1-1）。

しかしながら近年では、そういった「イベント効果論」に疑問の声が上がり始めている。まず、現行のイベントの経済的効果の算出手法には誤りが多く存在すると Crompton（1995）が指摘した。なお、イベントの経済効果以外の効果、いわゆる「社会的効果」に関する研究や検証の事例数は限られていると Chalkey ら(2001)が述べている。

表１-１　スポーツイベントが開催都市に及ぼす効果

効果	プラス面	マイナス面
経済的側面	・消費的活性化 ・雇用の創出 ・生活水準の向上 ・税収の増加	・開催期間中の物価上昇 ・不動産投機 ・入場者数の不足 ・不十分の資本金 ・イベント開催費用の甘い見通し ・他事業への過剰投資 ・イベント後の一時雇用者のレイオフ
観光・商業的側面	・開催都市の認知度アップ ・投資による商業活動の活性化 ・新しいアトラクションと観光施設の設置 ・アクセスビリティの改善	・劣悪のサービスと物価上昇による悪評判 ・地元資本と外部資本によるビジネス上の対立 ・観光による地域文化の変容 ・交通規制による商業活動の抑制
物理的・環境的側面	・新しいスポーツ施設の建設 ・インフラの整備 ・景観の向上	・生態系の汚染 ・自然環境の変化 ・景観の破壊 ・混雑
社会的・文化的側面	・地域の伝統と価値が高まる ・参加選手、役員、観光客との交流 ・スポーツに対する興味・関心の高まり ・スポーツ参加者の増大	・私的な活動の商業化 ・犯罪増加の可能性 ・テロ活動の可能性 ・地域の分裂と社会的混乱
心理的側面	・地域の誇りとアイデンティティの高揚 ・偏狭な地域意識からの解放	・カルチャーショック ・地域住民と観光客の間に生まれる誤解と対立
政治的・行政的側面	・開催都市の国際的知名度の高まり ・行政プランナーの経験・知識の蓄積と技術の練達 ・行政におけるスポーツへの理解の高まり	・政治家のエゴを満たすための地域経済の私物化 ・政治家の価値観の押しつけによるイベントの変質 ・政治家対立の激化 ・目標達成の失敗 ・運営日の超過 ・イベントを利用した政策の合法化

出典：原田（2002)、「スポーツイベントの経済学」p.64

スポーツイベントの研究領域においては、イベント効果について評価・検証の視点を「経済的効果」から徐々に「社会的効果」に変えていくという潮流に受け、近年において提起・注目されつつあるのは、「レガシー」といった概念であ

る。原田（2002）は、都市とスポーツの関わりを考えていく上で重要なことは、イベントが（一過性の）経済効果をどの程度都市にもたらしたかということではなく、イベントが残した様々なレガシー（遺産）をポジティブな影響に転化する試みであり、それを有用な財産として蓄積し有効活用するという、ポストイベントに関わる戦略であると述べている。特にオリンピックの開催においては、開催都市がレガシーを残す具体的な施策プランを提起できるかは重要なポイントになりつつある（MacRury, 2009）。IOC（国際オリンピック委員会）は本世紀に入ってからオリンピック・レガシーといった命題に重点を置いたようになり、2002 年に「The Legacy of the Olympic Games: 1984-2000」をテーマにシンポジウムを開くことにより過去のオリンピック・レガシーをシステム的に整理し始めた同時に、オリンピック開催都市に対しても、国・地域にレガシーを残すように取り組むことを求め始める。

IOC において現在重要視されている課題は、オリンピック大会の優位性と継続性を担保できる大会の計画であり、オリンピックの肥大化を抑制しつつ持続的なレガシー（sustainable legacy）を強調した計画である（原田、2008）。最近において代表的な事例として、2012 年に開催されるロンドン・オリンピックを挙げることができる。ロンドン・オリンピックの組織委員会は招致当初から、開催年である 2012 年から 2020 年まで 8 年間のレガシーペース（legacy phase）を打ち出し、オリンピックのレガシーを活用していく明確的目標を策定している（表 1－2）。オリンピックをただの一過性の事件ではなく、ロンドン及び周

辺地域の再生および長期的発展へ寄与できる「カタリスト」として扱い、計画的なレガシープランを取り組んでいることが伺える。

表 1－2　ロンドン・オリンピックのレガシー・ペース（legacy phase）

2012 年	2014 - 20 年	2017 年	2018 年	2020 年
オリンピックパークの建設、ストラトフォード市の建設	オリンピックパーク周辺の発展、周辺六都市の発展	6886 戸の住宅の完成	オリンピックスタジアムを用いての FIFA ワールドカップ誘致	ストラトフォード市発展の完成

出典：MacRury(2009), ’London’s Olympic Legacy’, p.47.

以上述べている重要視されつつある「イベントレガシー」のコンセプトに関しては、いまだに明確的な定義がされていない（Preuss, 2007）。なにせよイベントの「効果」と「レガシー」の定義がそれぞれ曖昧のままであるといったのは現状である。また、イベントレガシーに関する事例研究の量も極めて少ない。そういった現状を打開するには、スポーツイベントを評価・検証する視点をレガシーに重点を置き、操作的定義と研究範囲を決めた上、より多くのスポーツイベントを事例に研究を取り組む必要があると考えられる。

そういった必要性を背景として、本研究で取り上げられた研究事例は 2009 年台湾・高雄市に行われた第 8 回ワールドゲームズである。国際上において認知度と知名度が低く、国内においても伝統産業を基礎とする工業都市のイメージが強かった高雄は近年、都市の「路線転換」を図っている。その具体的ブループリントは、観光・文化創意・スポーツ都市への転身であり、都市中心部景

観の再造、地下鉄の建設、観光資源の整備、文化行事の積極的開催など都市再生へ向けて様々な施策が取り組むようになったのである。無名な地方都市はどのように海外観光客を呼び込めるか、またスポーツ施設の欠如と老朽化が目立つ状況においてはどのようにスポーツ環境を整備するか、といった命題に対し、高雄市政府が見出した 1 つの答えは、大型国際スポーツイベントの誘致・開催である。

2004 年にワールドゲームズの誘致に乗り出した背景には、新しいスタジアムの建設や既存スポーツインフラの整備と、この台湾史上初の大型国際スポーツイベントを通して「高雄—Kaohsiung」という名の国際的知名度を向上させるといった政治的の狙いがあった。しかしながら、オリンピックや FIFA ワールドカップのような知名度を有していないワールドゲームズは「台湾史上初の国際大型スポーツイベント」といった歴史的な意義が持つものの、そのイベントが期待された役割をどれほど果たせるか、どのようなレガシーをもたらしたか、またそれらのレガシーは今後も地域に持続的に寄与できるか。そういった部分について疑問を提起し、検証していくことは重要であり、有意義であると考えられる。

以上述べたことを背景とし、本研究はいくつかの問題を提起し、イベントレガシーといった概念を多面的に検討した上、2009 台湾・高雄ワールドゲームズのレガシーを学術的視点から検証し、レガシーを活用するポストイベント戦略について考えていきたい。

第二節　問題意識

本研究は、以下の問題意識を基づき、研究の目的を設定した。

（1）2009 高雄ワールドゲームズ（以下、2009WG）のイベントレガシーはどのような要素から構成されているのか？それらのレガシーは都市の発展に持続的に活用されているのか？どのようなポストイベント戦略が取り組まれているのか？

(2)ワールドゲームズのような国際的において比較的に知名度の高くないスポーツイベントがもたらすレガシーは、都市の長期的発展戦略の構築にどのような影響をもたらせるのか？

第三節　研究目的

本研究の目的は、以下の 2 つである。

（1）スポーツイベントのレガシーの定義を明確化し、その定義を用いて、2009WG を都市再生の一つのカタリストとして捉えた上、イベントが開催都市（高雄市）にもたらすレガシーの具体的構成要素を検証する

（2）それらのレガシーが地域発展・活性化に持続的に寄与しているかを検証し、さらにレガシーの存続に関する課題を見出し、国際スポーツイベントの開催都市が取り組むべきポストイベント戦略を検討する。

第二章　先行研究

第一節　国際スポーツイベントが地域にもたらす影響

本節では、国際スポーツイベントが地域にもたらす影響について、海外と日本国内の代表的事例に関する先行研究をいくつか挙げ、それらの研究内容や問題点について検討したいと考える。

まずは海外の事例研究から検討する。海外では 1990 年代以降、国際スポーツイベントの地域に及ぼす影響に関する研究は盛んになり、相当な量の研究が蓄積されている。比較的に早い段階で関心を集めたのは経済効果である。Mules and Faulkner（1996）は、1985～1994 年に渡って Adelaide Grand Pix、Eastern Creek Motor Cycle Grand Pix、Brisbane World Masters Games を対象として、財政的損失（financial loss）とにおけるインパクト（impact on GSP）の二つの指標で測定したことがあり、成功したスポーツイベントは都市に一定の経済効果をもたらすことができると指摘した。Gratton（2001）は、イギリスに開催されるスポーツイベントの数は世界屈指であり、それらのイベントがもたらす経済効果がイギリスに成長しているグローバルマーケットにおける優位を与えると述べている。

その他にも、就職機会の増加（Ap and Crompton, 1998; Andriotis, 2003; Ko and Stewart, 2002）、生活水準の向上（Getz, 1997; Hall, 1989, Johnson, 1994）、経済成長向上への働き（Ap and Crompton, 1998; Mihalik and Cummings, 1995; Ritchie

and Aitken, 1984）、公共施設の整備（Ap and Crompton, 1998; Mihalik and Simonette, 1998）、税収の増加（Andriotis and Vaughan, 2003; Brougham and Butler, 1981; Ko and Stewart, 2002）、外来投資の増加（Ap and Crompton, 1998; Andriotis and Vaughan, 2003）など、スポーツイベントの経済効果を個別的側面から分析する研究がたくさん存在している。具体的に量化できる経済効果に政府関係者とスポーツイベントのステークホルダーが高度な関心を寄せていることが伺える。

経済効果の測定は主に、スポーツイベント開催にかかる支出額の総計（直接効果）と支出額をともにした産業関連分析による生産誘発額（経済波及効果）を合計した数値で算定されるのが一般的である。しかしながらそういった算出手法には、統一性の欠如や長期的視点の欠落など、様々な問題点があると指摘されている（原田, 2002）。それを背景に、経済効果の反対的立場に置かれる「社会的効果」が近年、重視されるようになったが、社会的効果に関する研究は蓄積されていないのが現状である。その原因は、社会的効果の定義の不明確と、評価手法が確立されていないことが挙げられると考えられる（観光庁、2010）。

海外では、スポーツイベントの社会的効果について、異文化理解の促進（Ap and Crompton, 1998; Ko and Stewart, 2002）、地域への一体感（Liu and Var, 1986; Ap and Crompton, 1998）、生活の質の向上（Ap and Crompton, 1998; Andriotis and Vaughan, 2003）、レジャーに触れ合う機会の創出（Allen, Hafer, Long and Perdue, 1993; Ap and Crompton,1998）などの側面から分析した研究が存在しているが、

数量的には未だに少ないと思われる。

さらに、日本国内の事例研究を検討する。観光庁（2010）が、近年日本で開催される国際スポーツイベントの経済効果を整理した（表 2－1）。

表 2－1　日本における近年の国際スポーツイベントの経済効果

大会名称	大会規模と運営費	経済効果
第 13 回神戸ユニバーシアード大会（1985 年）	106 ヶ国・地域、参加人数 3,949 人、運営費 75 億円	生産誘発額：1 兆 3,560 億円
第 12 回広島アジア競技大会（1994 年）	42 ヶ国・地域、参加人数 6,828 人、運営費 275 億円	生産誘発額：3 兆 3,700 億円
第 18 回福岡ユニバーシアード大会（1995 年）	162 ヶ国・地域、参加人数 5,740 人、運営費 170 億円	経済波及効果：8,409 億円
第 18 回長野オリンピック大会（1998 年）	72 ヶ国・地域、参加人数 3,769 人、運営費 1,093 億円	生産誘発額：4 兆 6,803 億円

出典：観光庁（2010）、「スポーツツーリズム連携推進会議」配布資料より

また、近年開催されたスポーツイベントの中に最も注目を集めたとも言える 2002 FIFA ワールドカップについて、日本がベスト 8 進出の場合は国全体に 3 兆 3,049 億円の経済波及効果をもたらすと推定された（㈱電通，電通総研，㈱社会工学研究所，2001）。経済効果以外、ワールドカップが日本国内各地のキャンプ地にもたらす社会的効果として、（1）地域情報の発信、（2）青少年の健全育成、（3）地域のスポーツ振興、（4）国際交流の促進、（5）ボランティア・NPO 組織の育成、（6）スポーツ施設の整備、（7）地域アイデンティティの醸成、（8）地域間・地域内の交流、（9）住民活動の促進、などがあったと指摘されている

（木田、2006）。

国際スポーツイベントが地域にもたらす影響に関するこれまでの研究を回顧すると、いくつかの問題点を絞り出すことができる。まずは、評価手法における統一性の欠如である。国際スポーツイベントの「経済効果」においても「社会的効果」においても、測定・評価の手法が多岐に渡り、統一性を欠いているのが現状である。そういった現状の中、スポーツイベントの効果の算出が恣意的な数値の操作となり、政府や主催側の思惑により政治的材料になるケースも少なくないと指摘されている（原田、2008）。また、経済効果に関する効果と比べ、社会的効果に関する研究は比較的に蓄積されていないのも問題点である。さらに、ほとんどの研究は短期的効果にしか着目せず、長期的視点を欠いている部分はもう１つの課題であると言える。スポーツイベントにおいて開会式に向けた無理な帳尻合わせが、将来の公共投資を食いつぶすとともに、必要以上に豪華な施設を後に残し、運営費の工面といった負の遺産問題を生じさせることがあると原田（2008）が述べている。長期的視点を欠いている研究は、そういった問題を見逃す可能性が高いと考えられる。

本研究が「レガシー」に着目する背景には、以上述べている国際スポーツイベントが地域にもたらす影響を評価する際の問題点・課題がある。スポーツイベントの効果を多様的・長期的視点から評価するには、「レガシー」といったキーワードを省いてはならないと考えられる。本章の第二節では、これまでのスポーツイベントのレガシーに関する研究をレビューし、検討していく。

第二節　レガシーといった概念の検討

「レガシー」は本来、文化・芸術などの領域で多用されてきた概念である。ところで近年、世界中の各都市に起こっている、「永続的発展」を目指すといった潮流を受け、国・自治体が投入する莫大な資源で開催する大型スポーツイベントも、遺産（レガシー）を残せるかといった視点から評価されるようになった。

そこで浮き上がったのは、スポーツイベントのレガシー（以下、イベントレガシー）をどのように定義すれば良いのか、といった課題である。Oxford English Dictionary（2006）によると、レガシーは「意図的に特定の人間に残された金銭および資産」と定義されている。しかしながらイベントレガシーの場合は、より広い定義が必要とされるのは明白であろう。Kang（2006）は、レガシーはスポーツイベントの「多様な効果」（diverse impacts）に近い概念と指摘している。また Cashman（2006）は、「レガシーとはフィックス（決められた）されたものではなく、動的で進化的なものである」と述べている。さらに Preuss（2007）は、スポーツイベントのレガシーを「イベントが都市にもたらす様々な構造的変革による持続的効果」と定義している。これらの文献により、レガシーの流動的特質を理解できる一方、その定義しにくい性質も伺える。ただし、イベントレガシーの主な条件として、Kang（2006）が（1）イベント後も持続的に存在する、（2）イベントの開催がない限り発生しないもの、と述べている。これを基づき、本研究はイベントレガシーを「イベント開催に投入された資源（ヒ

ト・モノ・カネ）によって発生する、開催後に長期的・持続的に地域に存在する様々な影響と効果」と定義したいと考える。

2005 年以降、スポーツマネジメント関連の各国際学会で発表されるイベント・レガシーに関する事例研究は増えつつあり、関心と注目を集めている傾向が見える。ただし全体的数量から言うと、イベントレガシーは 1 つ研究分野としての知恵がまだ蓄積されていないのが現状であろう。海外の代表的な事例研究として、Kang（2006）は、ソウルで開催された 1986 オリンピックと日韓共催の 2002 FIFA ワールドカップを事例に、両大会が韓国に残したレガシーを分析した。Kang によると、イベントレガシーは 8 つの側面（都市構造・インフラ・知識・人的資源・シンボル・社会文化・経済・制度）と 3 つの視点（都市・スポーツ・観光）から捉えることができる。Kang がその 8 つの側面を基づき、ソウル・オリンピックの具体的なレガシーについて、オリンピックパーク、交通ネットワークの整備（インフラ）、ソウル・オリンピック博物館（知識）、韓国の国家イメージの変革（シンボル）などがあると述べ、さらにワールドカップのレガシーについて、ワールドカップ・スタジアムとワールドカップ・パークの建設（都市構造）、諸外国の韓国に対する認識の変化（シンボル）などがあったと述べている。当研究より、両大会がソウルを中心にハードウェア面のレガシーをもたらし、韓国全体にソフトウェア面のレガシーをもたらしたことを伺える。

日本の場合、1998 長野オリンピックと 2002 FIFA ワールドカップの両大会の

イベントレガシーを中心とする研究が存在している。長野オリンピックの場合は負の遺産が比較的に目立ち、1 兆 6 千億円を超える借入金残高が長野県を厳しい状況に置いたと原田（2008）が指摘している。2002 FIFA ワールドカップについて、西原ら（2004）は、イベント・レガシーの視点から開催地住民の意識変容を検証し、ワールドカップによる観戦行動の変化が少ないが、住民のボランティアへの関心の向上が見られたと述べている。

これまでのイベントレガシーに関する研究をレビューすると、関連研究の量の不足と、レガシーの活用による開催都市の長期的発展への提言の欠如といった課題を見出すことができると考えられる。したがって本研究は、2009WG の事例研究を通じ、イベントレガシーに関する知の蓄積と、開催都市（高雄市）がこれから取り組むべき「レガシーを活用したポストイベント戦略」について提言していきたい。

第三節　2009 高雄ワールドゲームズに関して

本研究が選定した事例：「2009 高雄ワールドゲームズ」（以下、2009WG）は、以上述べている海外および日本国内の事例と比べ、比較的に小規模な国際スポーツイベントである。しかしながら「スポーツ途上国」の台湾にとって、2009WG は史上初の国際総合型メガ・

スポーツイベントであり、国にも高雄市にも大きな意味を持つ大会である。中国との間の主権問題により国際的に厳しい状況に置かれている台湾は、国際大型スポーツイベントの開催でこういった状況を打開しようとする、という政治的思惑を 2009WG に寄せているのは事実である（趙、2007）。

政治的目的を主眼に誘致した大会ではあったが、この「史上初」の大型イベントが高雄市の地域活性化にとって起爆剤的な役割を果たせる可能性も秘めていると期待されていた。工業都市の色が濃かった高雄市は 2000 年以降、路線転換を図り、10 年期間の都市再生プロジェクトを取り組んでいた。高雄の都市再生政策が目指す目標は、「観光・文化創意・スポーツ都市」である。その目標を達成するには、現有資源の利用以外、様々な国際イベントの誘致・開催による新たな施設の建設が必要であると行政側が判断したため、その第一歩として開催のハードルが比較的に低いワールドゲームズの誘致に乗り出したのである（趙、2007）。これまでのワールドゲームズの開催状況を表 2－2 で示す。

表 2－2　ワールドゲームズの開催状況

回	開催年	開催地	競技数（公式・公開）	参加選手数（国・地域）
1	1981	サンタクララ（アメリカ）	16（16・0）	1,265 名（9）
2	1985	ロンドン（イギリス）	21（21・0）	1,550 名（57）
3	1989	カールスルエ（西ドイツ）	19（17・2）	1,965 名（49）
4	1993	ハーグ（オランダ）	26（22・4）	2,275 名（49）
5	1997	ラハティ（フィンランド）	29（24・5）	1,725 名（75）
6	2001	秋田（日本）	31（26・5）	2,193 名（93）
7	2005	デュイスブルク（ドイツ）	32（26・6）	3,205 名（93）
8	2009	高雄（台湾）	31（26・5）	2,908 名（84）

出典：師岡（2009）、「第 8 回ワールドゲームズの成果と課題」p.34.

2009WG は、2009 年 7 月 16 日～26 日の 11 日間に開催された。秋田ワールドゲームズが 23 億円しか費やさなかったのに対し､高雄が今回のワールドゲームズに多額の開催経費を投入し、その総額は 130 億台湾ドル（約 340 億円）に達した（メインスタジアム建設費 53 億台湾ドル含む）（高雄市政府、2010）。観客数は延べ 113 万人を記録し、チケット販売収入は 6,236 万台湾ドル（約 57 億 7,000 万円）に達した。また、関連の観光収入は 20 億台湾ドルを超えたと発表された。開催期間中住民の関心度が高く、開会式と閉会式のテレビ中継はそれぞれ 5%と 4%を超え、好調であった。

大会の開催成果として、（1）今まで知られていなかったスポーツ種目の存在に知らせ、スポーツに対する認識を広げた、（2）スポーツを「見る楽しさ」と同時に「する楽しさ」を味わう機会を提供した、（3）地方都市でも国際的なスポーツイベントを開催できることを実証した、（4）これからの大会の成功は行政と民間の協力関係が鍵であり、特に民間ボランティアの存在は不可欠であることを実証した、などを挙げることができると師岡（2009）が述べている。ただし短期的成果の評価に限らず、イベントレガシーの視点から見ると、歴史的な意味を持ち、起爆剤として都市再生の一役を買えると期待される 2009WG が高雄にどのような長期的・持続的影響をもたらしたかといった部分を検証することは重要であると考えられる。そういった課題に着目し、高雄市政府は開催後 1 年を経った 2010 年に「2009 ワールドゲームズが高雄市の全体的発展にもたらす影響に関する調査」といった研究プロジェクトを立ち上げ、（1）都市マ

ーケティング、（2）経済効果、（3）ボランティア参加、（4）ツーリズム効果、（5）スポーツ参加、といった 5 つのカテゴリーで 2009WG が高雄市にもたらす影響を分析した。

表 2－3　2009 ワールドゲームズが高雄市の全体的発展にもたらす影響に関する調査概要

カテゴリー	影響の具体的内容
都市マーケティング	1. 2009WG は都市マーケティングにポジティブな影響を与えたと考えられる 2. 2009WG の海外放送が質・量的には高雄市を成功的に宣伝したとは言い難い 3. マスコミを利用した国内マーケティングは効果的
経済効果	1. 2009WG の直接効果と経済波及効果は合計、台湾ドル 2.89 億（約 7.6 億円）に達した
ボランティア参加	1. 2008 年 9 月に成立した「ボランティアセンター」は 2009WG のボランティア計 4,443 名を効率的に運用できた 2. ボランティアの満足度が高い 3. ボランティア精神がコミュニティに根付けたとは言い難いが、住民はボランティアの重要性を認識できた
ツーリズム効果	1. 高雄に対する海外観光客の満足度が高い 2. 高雄に対する国内観光客の主なデスティネーションイメージは「友好的」「情熱的」「便利的」「清潔的」「現代的」など、全体的に得点が高く、ポジティブである
スポーツ参加	1. 2009WG の後、住民のスポーツ参加意図が上昇 2. 2009WG のボランティア経験者は規律的スポーツ参加者になりやすい

注：「2009 ワールドゲームズが高雄市の全体的発展にもたらす影響に関する調査」より、本研究（2012）筆者が加筆修正

自治体の公式調査レポートであるため、経済効果・観光効果の計算など、個人的研究では取得が困難なデータはこの調査で見られた。しかし、この調査では物足りない部分が非常に多いと考えられる。膨大なデータを並ぶ調査ではあ

るが、取れた数値の 2009WG との関連性分析がされず、憶測に過ぎない部分が多いのである。たとえばスポーツ参加率の上昇など、「2009WG がもたらす影響」と断言できないデータの扱い方は、調査では粗末であると考えられる。また、この調査では 2009WG が高雄にもたらす継続的・長期的影響について調査されず、イベント・レガシーの視点を基づく分析も一切されていない。

2009WG は都市再生のカタリストの鍵の 1 つとして関心を集め、ワールドゲームズ史上では「破格的」とも言われている莫大な資金で開催されたが、華やかな閉会式の後に残された具体的レガシーに着目する研究調査がされていない現状では、一過性のスポーツイベントになってしまう可能性もあるといった危機感を抱えなければならないと筆者が考えている。そのため、本研究はレガシーといった長期的視座から 2009WG を検証する必要性を改めてここで提起したい。

第四節　先行研究のまとめ

本章では、（1）国際スポーツイベントが地域にもたらす影響に関する文献のレビュー、（2）イベントレガシーといった概念の定義、（3）研究事例である 2009WG に関する研究の現状の検討、が行われた。

これまでの先行研究から得られた既有の課題を解決するための方向性は、(1) 国際スポーツイベントの影響を長期的視点から評価する必要性により「レガシー」といったコンセプトが生まれ、一研究分野としての知の蓄積はこれから着

手すべき方向である、（2）2009WG を研究事例として都市再生と地域活性化に持続的に寄与しているかに関する検証が必要であり、イベントの長期的・継続的効果をレガシーといった視点から全面的に検討する方向性を本研究で確立したい。本研究はこれから、研究目的に見合う研究アプローチを設計し、研究の流れ、および調査方法の全体像を第三章で述べたい。

第三章　研究方法

第一節　質的研究法の応用

スポーツイベントのレガシーの研究調査にあたって一つの大きな難題は、測定手法である。イベントの性質・開催都市の取り組みの違いによって、レガシーの種類と範囲も異なると考えられる。また、これまでの先行研究により、レガシーの測定に応用できる明確的な量的指標が確立されていないことも明らかになった。以上の理由から、本研究は、2009WG のレガシーを把握するには、質的研究法を用いることが妥当であると考える。質的研究は現在、盛んになってきている（大谷、2007）。従来、「量的研究法の限界を出発点とする」といった位置に置かれた質的研究は、基本的な特徴として（1）方法と理論の適切性、（2）研究参加者の視点とその多様性、(3) 研究者と研究とのリフレクシビティ、（4）アプローチと方法の多様性、の 4 つがあるとされている（Flick，2011）。とりわけ量的研究者と比較する場合、質的研究者はより柔軟的・多様的・全面的な視点から研究を取り組むことができるとされている。

ところで質的研究の実施のプロセスは、すべてのステージが交互に交替しながら進む。その点で量的・仮説検証的研究のように、一方向に進むものではない。そのため研究者には、先行研究の調査・研究設問の設定から、データの採取・分析・理論化までの一連の作業を行う能力が求められている（大谷, 2007）。

本章の以下では、本研究で用いるデータの採取方法：専門家インタビューを

第二節で、研究プロセスと調査概要を第三節で、データの分析方法：SCAT 分析法を第四節で説明する。

第二節　専門家インタビュー

インタビューは質的研究データを収集する一つの重要な手法であり、（1）構造化インタビュー（2）半構造化インタビュー（3）非構造化インタビューの 3 種類に分けることができる。その中では特に、半構造化インタビューは研究者に頻繁に使用されている。その背景にあるのは、構造化されたインタビューや質問表を用いたときよりも、比較的にオープンに組み立てられたインタビューの状況の中で、インタビュイーのものの見方がより明らかになるとの期待である（Kohli, 1978）。半構造化インタビューの方法としては、焦点インタビュー、半標準化インタビュー、問題中心インタビュー、専門家インタビュー、エスノグラフィック・インタビューなど様々なタイプがあり、研究対象の異なりによって研究者が一番適切な方法を選択しなければならない。本研究は、専門家インタビューを採用した。

Meuser and Nagel（2002）は、半構造化インタビューの特殊な応用形態として、専門家インタビュー（experts interview）を取り組んでいる。このインタビュー形式ではインタビュイーは一人の人物としてよりも、特定の現場に携わる専門家として扱われる。つまりインタビュイーは単独の事例としてではなく、特殊な専門家グループの代表者として調査されるわけである。

Bogner and Menz（2002）はさらに、専門家インタビューの三つのタイポロジー：（1）新しいフィールドでの方向性の生成、（2）理論の体系化、（3）研究対象に関する理論やタイポロジーの構築、を提案している。本研究が研究するイベント・レガシーはスポーツ産業・マネジメント領域においても比較的に新たなテーマであり、理論体系は構築されておらず、知の蓄積も未だにされていない。そのため本研究は専門家インタビューを、「イベント・レガシーに関する知」を発掘し、システム的に分析することに適する手法であると考える。本研究における専門家の選定方法は、本章の第三節で説明する。

第三節　研究のプロセスおよび調査概要

本研究のプロセスを、以下の図 3 - 1 で示す。

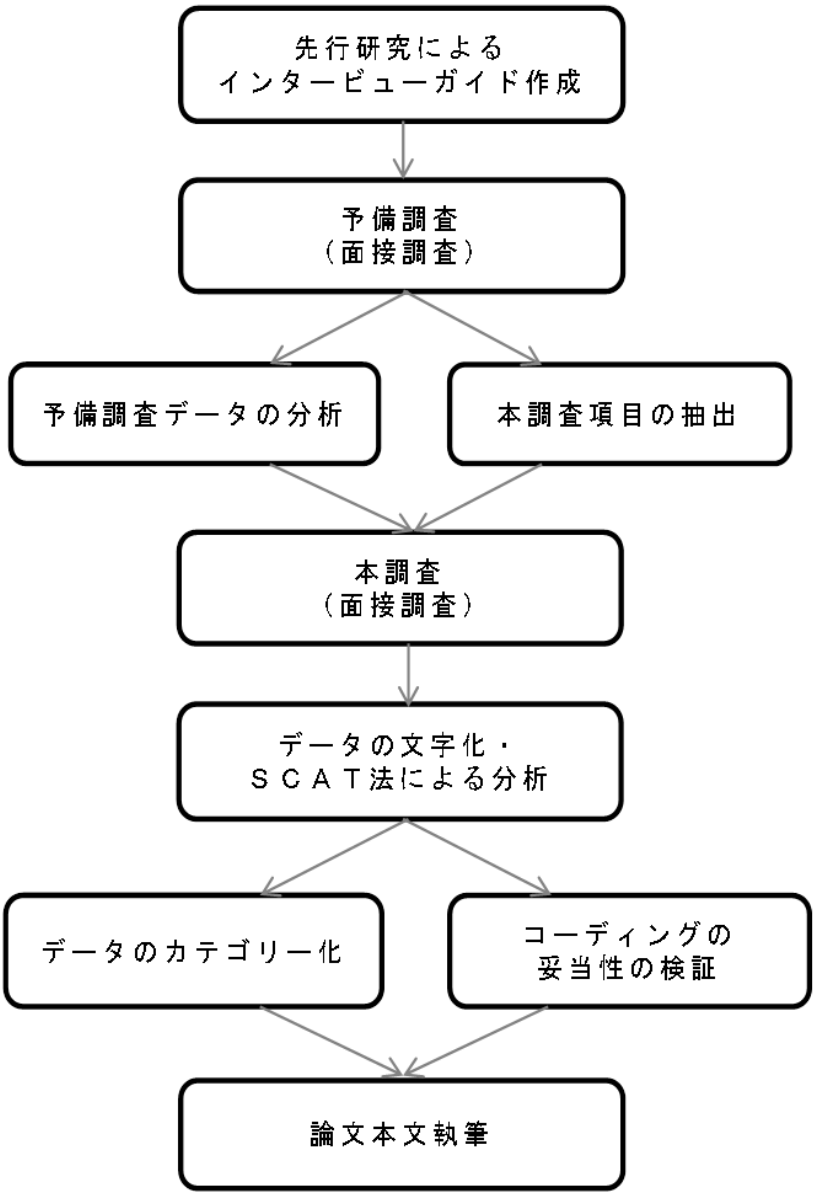


図 3 - 1　研究のプロセス

2009WG のレガシーの中身を詳しく調査するには、まずはレガシーをカテゴリー化する必要がある。そこでカテゴリーを抽出するための予備調査を行った。予備調査のインタビューガイドは、Kang（2006）の先行研究からレガシーの可能な分類を抽出して作成した。

予備調査は 2011 年 9 月 13 日に行われた。予備調査のデータから、2009ＷＧのレガシーを構成する 6 つのカテゴリーを抽出した。6 つのカテゴリーは、(1) 施設（2）知識・ノウハウ（3）人的資源（4）政策・制度（5）スピリット（6）国際的認知・印象である。

この 6 つのカテゴリーを基づき、本調査ではさらに、それぞれのカテゴリーにおける「具体的構成要素」、「存続における課題」、「ポストイベント戦略」について詳しいインタビュー調査を行った。

本研究のインタビュー調査は、2009WG に詳しい知識と知見を持つ専門家を選定して行った。専門家（インタビュイー）の選出は 2 つの方法を基づいて行った。1 つ目は筆者の大学時代の指導教授（スポーツマネジメント専門家）の推薦による選出であり、2 つ目は高雄市政府が行った「2009 ワールドゲームズが高雄市の全体的発展にもたらした影響に関する調査」といった研究プロジェクトに参加した専門家からの選出である。以上の方法より作成したインタビュイー候補リスト 20 名に対してメールや電話にて調査依頼を行い、最終的には 10 名の専門家の協力を得た。のち 3 名に対して予備調査を行い、7 名に対して本調査を行った。調査の概要とインタビュイー・リストは、以下の表で示す。

【予備調査】

・日時：2011 年 9 月 13 日　13：00～16：00

・方法：半構造化インタビュー

表 3‐2　インタビュイー・リスト（予備調査）

Ｎｏ．	性別	現職	面接時間
I-01	男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部講師 （2009WG で競技マネジメントを担当）	33 分
I-02	男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部助教授	28 分
I-03	男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部准教授	42 分

【本調査】

・日時：2011 年 10 月 28 日～11 月 8 日

・方法：半構造化インタビュー

表 3‐3　インタビュイー・リスト（本調査）

Ｎｏ．	性別	現職	面接時間
I-04	男	K 都市発展財団理事長	38 分
I-05	男	Y 大学公共政策学部講師	45 分
I-06	男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部講師 （2009WG で運営総括を担当）	63 分
I-07	男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部講師	35 分
I-08	男	S 大学レジャー・スポーツマネジメント学部教授	45 分
I-09	男	高雄地下鉄株式会社取締役代表	25 分
I-10	男	N 大学レジャー産業経営学部教授	23 分

第四節　SCAT 分析法

質的データ（本研究ではインタビューによって言語記録を指す）を分析する際に使用するアプローチは様々存在しているため、研究者が選択に困惑するときもある。最も広範に使われる手法は、Glaser and Strauss（1967）が開発した「グランデッドセオリー」である。これは分析手続だけではなく、データ採取から理論化までの研究デザイン全体を規定するフレームワークであり、あらゆる領域で世界的に用いられる優れる手法である。しかし、この手法が適用できるのは、比較的に大規模のデータの採取と長い研究期間を要する大掛かりな研究であり、ごく小規模なデータやすでに採取した手持ちのデータには適用できない（大谷、2007）。

そこで小規模な質的データの分析のために開発されたのは、大谷（2007）が考案した「SCAT」（Steps for Coding and Theorization： 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法）である。SCAT は、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれのセグメントに、（1）データの中の着目すべき語句（2）それを言い換えるためのデータ外の語句（3）それを説明するための語句（4）そこから浮き上がるテーマ・構成概念を順にコードを考えて付していく 4 ステップのコーディングと、（4）のテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きからなる分析手法である。この手法は、比較的小規模の質的データの分析には有効であると考えられる。また、明示的で定式的手続きを有するため着手しやすいといったのは優れ

る点である。

本研究は単一事例（2009WG）に関して限られる人数（10 人）の専門家にインタビューを実施し、データの量はより小規模であるため、SCAT が本研究の研究枠組に適していると考えられる。SCAT のマトリクス記入例と分析手順は、表 3 - 1 で示す。こういったマトリクスをインタビュイー1 名に対して 1 つ作成し、計 10 つのマトリクスでデータ分析を行った。本研究で抽出された 6 つのレガシー・カテゴリー（1）施設（2）知識・ノウハウ（3）人的資源（4）政策・制度（5）スピリット（6）国際的認知・印象、それぞれに対して「具体的構成要素」、「存続における課題」、「ポスト・イベント戦略」を調査した結果については、4 つのステップを踏まえてデータの理論化を行い、マトリクス最後尾の「ストーリーライン」と「理論記述」で記入する。

表 3 - 1　SCAT の分析手順

番号	発話者	テクスト	<1>テクスト中の注目すべき語句	<2>テクスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテクスト外の概念	<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）	<5>疑問・課題
1	聞き手	……（質問）					
2	話し手	……（テクスト）					
3	聞き手	……（質問）					
4	話し手	……（テクスト）					

ストーリーライン（現時点で言えること）	……（ストーリーライン）
理論記述	……（理論）
さらに追究すべき点・課題	……（課題）

第四章　研究の結果および考察

本章においては、2009WG の 6 つのカテゴリー（1）施設（2）知識・ノウハウ（3）人的資源（4）政策・制度（5）スピリット（6）国際的認知・印象における本調査結果を整理し、考察を行う。

第一節「具体的構成要素」、第二節「存続における課題」、第三節「ポストイベント戦略」においてそれぞれ具体的に説明する。第四節「考察」では、研究結果を全体的に総覧し、その中から得られた論点を明らかにする。

第一節　2009WG レガシーの具体的構成要素

（1）施設

2009WG では、「現有施設を最大限利用」といった理念を掲げてきた従来のワールドゲームズと異なり、40,000 人の観客を収容できる新たなメインスタジアムが建設された。この国内最大級のスタジアムのポストイベント利用策にめぐって台湾スポーツ界が様々な論争が起こり、2009WG のレガシーにおいても主な争点となった。メインスタジアムは政府側に「Long Term Stadium」と名付けられ、その名前にも「永続的利用可能」といった意味合いと願望が込められているため、本研究は 2009WG の施設レガシーについてインタビュー調査を実施した際、メインスタジアムの後続利用状況と地域にもたらす効果に相当な時間をかけて聞き込みを行った。以下は、2009WG メインスタジアムに関するイン

タビュー結果である。

<u>インタビュイー　I-06</u>

「ワールドゲームズのメインスタジアムについて、市政府スポーツ局は現在、文化や観光を取り入れるなど、より多面的な役割を施設に果たせもらうという取り組みを実施しています。たとえば、スタジアム内にワールドゲームズ博物館を設置するとか、周辺の観光ルートを設置するとか、より小規模なスポーツイベントを開催するとか…そういった部分は取り組んでいますね。そもそもこのスタジアムは当初、周辺住民にも使用してもらえるためにどう作るべきか、ということを考えた上で建設したものでもありましてね。ですので、スタジアムの屋根による太陽光発電で周辺にエネルギーを提供することも、スポーツの参与によってより良いコミュニティ生活の創出ことも、観光資源としての活用も、文化創造のカタリストも最初から考えられている、スタジアムの貢献できることというか、建設の目標の一環というか…。ご存知なのかわからないが、このワールドゲームズスタジアムは、LivCom Awards 2011 を取ったんです。この国際大賞が表彰する施設は、コミュニティ住民の生活重心になれるような施設で、スタジアム内部ではなく「外部利用」が重視されるわけです。つまりですね、スタジアムの中にイベントとかがなくても、スタジアム外部の広い芝生と公園敷地とか、そういったところを住民に利用してもらい、彼らの生活の質を向上させる機能を持っているわけです、ワールドゲームズスタジアムは。こういった部分から見れば、メインスタジアムの後続利用は評価されるべきではないかと思いますけど。」

以上の内容によって、メインスタジアムのイベント後の活用として、博物館と見学ルートの設置、またスタジアム周辺の広い芝生・敷地の公園としての機能性で周辺住民の生活の質が向上できるといった「外部利用」などが挙げられると分かる。屋根に設置されている太陽光発電装置によってメインスタジアムが「グリーン・スタジアム」といった美名を得ることができた。しかしながら 7 人のインタビュイーの中、具体的活用状況を指摘したのは 1 人しかいないと

いった状況から、メインスタジアムの活用、およびレガシーとしての価値は周辺住民に資するものにとどまり、高雄市の地域全体には広がっていないと考えられる。

<u>インタビュイー I-05</u>

「たとえば、ワールドゲームズで整備された施設の利用。うちの近くの陽明スケート場は今、前より多くの子供が利用しているんですよ。ワールドゲームズはそのカタリストなんじゃない？だからね、住民のスポーツ参加にも効果ありでしょう。私も陽明スケート場なんて最初は知らなかったし、ワールドゲームズでうちの選手がそこで金メダルを取ったから初めて知ったのよ。で、みんながそこを利用し始めていたのです。」

メインスタジアム以外、スケート場・体育館・スカッシュ場などの施設は2009WG 開催のため整備され、一新することができた。知名度やアクセスが良くなかった施設も 2009WG の開催で広く知られ、イベント後の利用率が向上したという。

（2）知識・ノウハウ

台湾史上初の国際メガ・スポーツイベントとして 2009WG がこれまでになかったイベント開催の知識・ノウハウを高雄にもたらしたと大会中に多くのメディアが指摘した。これらのノウハウを活用できる場合、高雄のこれからの国際スポーツイベント誘致･開催に莫大のメリットをもたらせると想定されている。2009WG の知識・ノウハウがどのように保存され、活用されているのかについ

て、本研究が着目した。

インタビュイー　I-06

「高雄には大型スポーツイベントを開催する基盤が整ってきました。施設もあるし、誘致・開催という一連の過程で蓄積された知識とノウハウもあるし。これらはすべて、無形な資産なんです。将来、さらなる大型スポーツイベントの開催はたぶん問題ないでしょう。ただイベント規模の問題です。オリンピックはさすがにまだ無理だけど、他のイベントはあります。イベントを最初から最後までうまくやりきれる知恵はすでに、高雄にはあります。百パーセントやり切れるとは言えないけど、少なくても我々にはこういった経験を持っているのです。先ほども言いましたように、積み重ねていかないといけないのです。これからさらにイベントをいっぱい開催すると、住民参加もボランティア精神も、イベントに関するノウハウもさらに蓄積していくのです。」

インタビュイー　I-07

「今振り返ればですね、組織委員会でペーパーワークをいっぱいやりましたけど。あのときは『こんなことやって何ができる？』と思ったこともあるけど、ある程度からいえばそれらのペーパーワークも、知識とノウハウの一部なのではないか。各競技種目はそれぞれどのような準備をしなければならないとか、こんな問題が起こったとき誰が解決してくれるとか、目標管理の仕方とか。それらのペーパーワークで全部のインフォメーションは、書面にしっかり書いてあったので。今度またイベントを開催するとき、ある程度役に立てるのではないか、私たちが一生懸命やったそれらのペーパーワーク。」

「つまりどんな状況でどのような行動を取るべきかという部分と、人的資源の編成と、人的資源の個人資料の保存とか。こんな事情があるときの担当者は誰なのかとか、突発問題に対する解決策とか。そういった SOP ですべての役員は自分の組織における位置をしっかり認識できたのです。」

インタビュイーによると、2009WG が残された知識・ノウハウは主に（1）イベント開催の準備に関する SOP（標準作業手続）（2）各競技統括団体のマネジメント・マニュアル（3）サービス・ファンクションのマニュアルの 3 種類があ

る。すべてのデータは高雄市政府に集中管理されている。次の大型スポーツイベントが開催される場合、これらのデータは貴重な財産として活用できると想定される。

（3）人的資源

2009WG は台湾においてこれまでになかった大型国際イベントであり、運営統括・会場マネジメント・通訳など様々な人材がイベントの開催に必要とされた。2009WG に参加した専門スタッフとボランティアは長時間の訓練・教育を受け、大型イベントの運営に実際経験したため、貴重な人的資源としてこれからも活用しなければならないと考えられる。

インタビュイー I-05

「この二年間我々は、こういった社会的な動きを観察できました。福祉や地域行事に現れる、過去になかった組織的なボランティア行為をですね。そういった部分見えました。そういった変化を触発したのは、ワールドゲームズだと思います。昔みんなはボランティアに関する概念を持っていなかったからです。昔はみんな、何でいきなりボランティアなんかやるんだ、そんな暇あるのか、とか思ったのですよ。特定なボランティア団体に限らず、学生たちもボランティア活動に献身するようになりましたよ。だからね、これらの変化にはワールドゲームズは確かに、カタリストとしての役割を果たしましたよ。」

インタビュイー I-06

「人的資源については、いくつかのカテゴリーを分けて話さないとね。まずは専門人力からです。ワールドゲームズが終わったら、彼らは主に、4 種類の領域に移ったのです。

第一は行政部門です。行政部門からワールドゲームズの組織委員会に出向きし

てきた彼らは、こういった大型なスポーツイベントを経験したわけでね、大きな衝撃を受けたと思います。それにスポーツに関する知恵をいっぱい得たと考えられるのではないか。元の部門に戻ったら、スポーツの促進に力を尽くす人もいると聞きました。そしてスポーツ政策に関わる人間もその中にいますので、高雄のこれからのスポーツ施策に影響を与えますよ。特に大型スポーツイベントの再誘致とかね、こういった部分に着実に影響していますよ。

第二は語学人材の後続活用です。彼らはイベントの後、民間企業、たとえばスポーツマーケティングの会社とかに移ったり、あるいは政府部門に移ったりしました。留学に旅立った人もいます。彼らは今回、ワールドゲームズで外国人をたくさん接する経験を糧にし、語学能力においてさらなる成長を目指しているのです。このように、ワールドゲームズを通して語学人材の育成に大きく貢献したと思います。

第三は、教育界です。今回はイベントの開催にあたって、高雄市の各級学校から多大な支援が来たんですよね。これらの学校のスタッフはスポーツイベントのマネジメントやインフォメーションについて、たくさん学びました。これらの先生と学校の行政人員たちも将来、他のイベント開催にとって、大きな人的資産だと思います。

最後は、競技統括団体です。これらの団体のスタッフもイベントを通して、いろいろ勉強できたのです。たとえばスポーツ器材管理の専門知識。大型イベントがないと、なかなか一流の知識学べないからですね。それにもちろん、イベントマネジメントの専門知識。台湾ではこれまではこれほど大きなイベントがなかったので、本に書いた知識なんて実際取り組むチャンスはなかったのです。でも今回、彼ら競技団体は、大型スポーツスポーツに関する独自のノウハウをいっぱい身に着けたのです。今後これらの競技団体が自分のイベントを開催するとき、必ず今回のワールドゲームズで学んだノウハウを活用できるのではないかと私は思いますけどね。これで台湾スポーツ界の全体的のレベルアップにもつながるのではないか、イベント運営の面から見ればね。

その次、ワールドゲームズでは 4000 人以上のボランティアがいました。その中に、300 か 400 人は常勤として参与してきたのですね。これらのボランティアは高雄にとって、お宝のような莫大な資源だと思います。主には、引退した社会人と学生から構成されています。イベントが終わっても彼らの力を借りられるところがあるんですよ。だから自治体の取り組みとしては、データベースを作って彼らの資料を管理するという動きはあるのです。実際に去年から、市政府はすでにボランティア・バンクというのを作っているのです。主にはワールドゲームズで登録したボランティアの基本資料を集めて、そういったデータバンクで集中管理しています。スポーツに限らず、他のイベントにも運用できますよ、このデータバンク。これさえあれば、将来イベントを開催するとき、このデータバンクからすぐニーズに見合うボランティアを洗い出せるのです。

で、すぐ現場に派遣できます。これは自治体にとって大きな資産に間違いないのです。このデータバンクはまだ作っている最中ですが、来年の上半期には完成できます。ワールドゲームズの開催がなければ、こういったボランティア・バンクを作り出すきっかけはないとは思いますけどね。」

以上の内容より、2009WG の人的資源を（1）自治体・行政部門人材、（2）語学人材、（3）教育界人材、（4）競技統括団体人材、（5）ボランティアの 5 種類に分類することができる。（1）～（4）の人的資源は、「専門スタッフ」とも呼ばれている。専門スタッフは国際大型イベントの開催を経験したことにより、イベントマネジメントおよびスポーツに対する理解を深めることができたと考えられる。イベント後スポーツマーケティング会社に就職したケースも見られたため、これらの専門スタッフが今後のスポーツ界において重要な役割を果たす可能性がある。また、2009WG に携わった 4,000 人以上のボランティアは継続的にコミュニティ活動に尽力しているなど、レガシーとして人的資源の地域への貢献が確認された。

（4）政策・制度

2009WG を通じ、高雄市は自治体の大型スポーツイベント開催する能力を確認することができた。「大成功」と言われている 2009WG 高雄の今後のスポーツ施策をどのような影響を与えているかは重要なポイントである。

<u>インタビュイー　I-06</u>

「正直なところ、ワールドゲームズの開催経験があっても、今後の大型スポーツイベント誘致に有利と言い切れることができない。なにせよライバル都

市が多いし、それらの都市のスポーツインフラの整備がはるかに進んでいるからです。オリンピックやアジアゲームズのような大型イベントだったら、高雄は誘致しても結局は無理だと思います。インフラ的にも、財政的にもね。ただし高雄には他の可能性があります。たとえば、レジャー志向の強いイベントの誘致です。去年韓国で第一回のレジャーゲームズが開催されまして、第二回について、台湾では新竹が立候補する可能性が高いと見られています。こういったイベントだったら、高雄は誘致する実力を十分に持っています。あとは、単一種目開催型の国際大会ですね。高雄の現有のインフラから見れば、それは十分ありえます。逆にそちらの方はアジアゲームズなんかよりずっといいと思います。たとえばアジアビーチゲームズ。もちろん立候補の都市は多数出てくると予想されますけどね。実は IWGA の会長は、アジアビーチゲームズを高雄に開催させようと進言しています。2009 ワールドゲームズの大成功について彼がすごく喜んでいるし、高雄を高く評価しているからですね。それを受けて現在、市政府では大鵬湾、西子湾そして旗津あたりのビーチ整備の可能性について議論を進んでいます。もちろん決定事項ではないが、そういった可能性を検討しているということです。ビーチゲームズの他にも、ユースオリンピック、マインドスポーツゲームズ、コンバットゲームズなどの大会の誘致について、現在高雄市政府は検討しています。」

<u>インタビュイー　I-09</u>

ワールドゲームズの成果を無駄しないように、我々は市政府に「スポーツ・シティ」への転身について提言したのです。市政府も現在、その方向性を確立していろいろ努力をしています。

インタビューの結果から、2009WG が高雄市政府のスポーツ施策にもたらす影響として、(1) 高雄の現有資源を見極め、中小規模国際スポーツイベントと単一種目国際大会を中心に誘致するといった施策方向性、(2)「スポーツ・シティ」といったビジョンを市の全体施策のブループリントに取り入れたこと、2 つがあると確認できた。「観光・文化・スポーツ都市へ転身」といった都市再生の目標を基づいてカタリストとして誘致された 2009WG は、スポーツ・シティ

といった施策目標の確立に貢献したと言えよう。

（5）スピリット

2009WG 大会期間中、大会に対するメディアの報道が多く、住民の関心と連帯感を呼んでいたという。閉会式で IWGA 会長が大会を「史上最も成功した」と称賛したことにより､住民の連帯感と高揚感がさらにアップしたと見られた。こういった「連帯感」､「高揚感」といった心理的部分を、本研究が「スピリット」といったカテゴリーとして扱う。

インタビュイー I-05

「今回は、『高雄のお祝いイベント』みたいな雰囲気でやっていたんですよね。すべての住民が参与してもらいたかった部分もあって。イベントが成功したら高雄市民としてのプライドも高揚するでしょうし。」

「ワールドゲームズというイベントによって住民は、高雄という町の発展にもっと関心を寄るようになったのです。こういった過程の中にですね、いろんな議論が起こったのは良い現象だと思いますね。ワールドゲームズと、高雄の行政の｢出来｣に気になる人が出てきた､ということを意味するからね。昔は我々、住民が公共事務に関心しないのを恐れたのですよ。この町どうなってもいいという感じ。それはよくないこと。だからワールドゲームズの一番の価値として、住民が都市、つまり自分が住んでいる町に対して連帯感が持つようになって、公共事務への関心も上がってきたというのは挙げられるのではないか。ワールドゲームズの後にいくつかの後続的なイベントが開催されて、私がその中でいろいろ見てきたのですが、昔の高雄と一番違ったという部分は、やはり住民参加がだんだん活発するようになってきた部分ですね。それが印象的だった。スポーツ祭とか文化イベントとか、市政府がワールドゲームズの後に開催したイベントに参加した住民の活力というか、エネルギーというか、とにかくはっきり感じるようになってきたのですね。これらは、目に見えない無形な変容だと思います。イベントというのは、カタリストそのものですね。住民をイベントに参加してもらうことによって、『高雄もこういうことできるんだ』と実感してもらうことが大きな意味を持つの

です。昔は高雄というなら『文化砂漠』だと笑われたりしたけど、実際はこんなイベントも開催できる、ソフトパワーを持っている、という部分を住民が認識するようになりました。もちろん都市の発展というのは、自治体施策によって連続的なものではありますけどね。イベント一つで急に進歩するようなものではない。しかしそういった、ワールドゲームズはカタリスト的な働きはあったという事実は否定できないと思います。」

インタビュイー I-06

「ワールドゲームズの開催で「高雄市民でよかった」と誇らしげに言えるようになった住民は多くいますよ。こういった連帯感は都市の発展にとって重要な無形資産だと思います。」

インタビュイー I-09

住民の連帯感の向上は顕著的でした。プレイベントとポストイベントの調査を我々がしましたが、まあイベント前後の三ヶ月にですね、ワールドゲームズの開催で連帯感の変化について。顕著的に上がりましたよ。開催の出来についても、すごく正面的、肯定的な態度を示しました。こういった国際スポーツイベントを開催するのはすごくお金かかりますが、地域に長期的影響をもたらすのです。中央政府の人間が、ワールドゲームズってただお金の無駄遣いで後続的効果はあまりない、とかぶつぶつ言っていますが、我々は彼らと違う視点で見ていますからね。なぜならイベントの効果って、量化できない部分は多いです。特に住民の心理的変化と、国際認知度、都市イメージの向上など。もちろんそれは測りにくい部分です。でも、効果はあったかというと、それはありましたよ。

インタビュイー　I-10

「住民の連帯感について、個人的には感銘深いよ。この前さ、ワールドゲームズのために作られた「青春応援団」という記録映画を観たけど、観た？あれはね、面白いよ。感動しましたし。大型スポーツイベントはね、開幕式の演出プログラム以外にも、他のところで関連の演出をやったりするでしょう。たとえばワールドゲームズはどこでいろいろな演出をやったっけ？何と言うフェリーポート？あ、光栄フェリーポートだな。で、この青春応援団というグループはね、平均年齢 75 以上だよ。そこで演出プログラムを担当したのさ。たぶんそこには、住民の幅広い参加でワールドゲームズを盛り上げたいという高雄市政府の思いがあったと思うけど。」

「この青春応援団はまさに、ワールドゲームズに対する住民の連帯感を体現したと思います。住民が開催を支持していますし、開催の出来について満足度も高かったです。今になっても、もう一回ワールドゲームズをやって、と希望している住民も多くいます。これほど高雄市民のワールドゲームズへの思いが強いです。」

以上の内容から、他のレガシー・カテゴリーと比べ、スピリットについて多くのインタビュイーが語ってくれたのが分かる。整理してみれば、スピリットの具体的構成要素について、(1) 2009WG の「お祝いモード」により、住民の連帯感が高揚、(2) 住民の公共事務への関心・参加は増えた傾向、(3) 住民のスポーツに対する関心が向上、(4)「大型イベントをこれからも高雄に」という、住民のスポーツイベント開催への理解と熱意が見られた、などを挙げることができる。

(6) 国際的認知・印象

高雄が当初 2009WG を誘致した 1 つの主な理由は、高雄市の国際的認知度を向上させ、良いイメージを与えるといった狙いであった。そのため、イベントレガシーとして 2009WG が高雄の国際的認知・印象をどのように変えたかを解明することが重要であると考えられる。国際的認知を測ることは困難であるが、本研究は専門家の意見を基づいて質的に調査することにした。

<u>インタビュイー I-05</u>

個人の意見としては、(ワールドゲームズは) 高雄という都市の発展にとっ

て百パーセントのプラスになったと思います。もちろんこういった部分は量化できないのも認めますけど、「価値」というものそもそも、量化しにくい部分です。たとえば今回、少なくても国際認知度の向上は確かだと思います。

<u>インタビュイー　I-06</u>

「全体的に言うと、ワールドゲームズが高雄に一番レガシーとして貢献したのは、都市イメージの向上、という部分だと思います。なぜならそれは様々なメリットをもたらせるのです。国際スポーツ界において影響力を持っている有力人士は、「Kaohsiung」という都市に極めて好印象を持つようになりました。これは将来、高雄のスポーツイベント誘致にはどれほど有利なのか、言うまでもないのでしょう。」

「何を言おうと IWGA の会長はワールドゲームズの成果で高雄の味方になったからです。これは国際の誘致合戦の中、すごく重要なことですよ。それほどワールドゲームズの価値が高いと思います。」

以上の内容から、2009WG によって本来は無名だった「KAOHSIUNG」の名を国際スポーツ界の有力者に知らせ、国際大型スポーツイベントを開催した実力を見せつけたといったことで、高雄の今後のスポーツイベント誘致には有利であることが指摘された。

なお、海外観光客の高雄に対するイメージアップについて言及するインタビュイーはいなかったが、市政府に公式調査レポートによると、海外観光客の高雄に対する好感度は向上したことが分かった（調査した 33 名の中 30 名が再訪問意図あり）。

第二節　レガシーの存続における課題

（1）施設

2009WG のメインスタジアム「Long Term」の運営権にめぐって中央政府と自治体が論争を起こしていることで、スタジアムのポストイベントの有効的活用について懸念し、もしくは悲観的な意見を寄せる台湾スポーツ界の関係者が多い。本研究は施設といったカテゴリーで、メインスタジアムの存続における課題に主眼を置いてインタビュー調査を行った。

インタビュイー　I-04

「まず第一、市政府と中央政府は現在、メインスタジアムの管理権をめぐって争っています。管理権を明確にしてない限り、後続的なスポーツイベントの誘致はできない。スポーツイベントというのは産業そのもの。オリンピックもワールドゲームズもアジアゲームズも、都市イメージの向上と観光効果をもたらせるし、都市マーケティングという部分にも役立つのです。ワールドゲームズのメインスタジアムは安藤忠雄がデサインした、こんなにもすごく特徴的で魅力的なスタジアムである限り、後続のイベント誘致・開催の状況はあまり理想的には言えないと思います。国際イベントはともかく、国内イベントの数も相当少ない。現在のメインスタジアムはまるで、住民のレジャー活動の場所に過ぎないような存在であって、政府が 50 何億の経費もこのスタジアムに投入したということを考えれば、多少、残念だと思います。」

「メインスタジアムの課題をもう一度整理すると、第一、国際・国内スポーツイベントの誘致と開催の数が少ない。第二、スポーツ以外のイベント、たとえばコンサートなどの開催も限られている。北京オリンピックの場合、『鳥の巣』も『ウオーター・キューブ』も現在、観光施設に転身しているのです。高雄の場合は？メインスタジアムは地域に持続的に観光効果をもたらしているのか？私が見た限りそれはないと思います。効果があっても開催の 2009 年にだけなんですよ。ストップ、という状態なんです。もちろん完全放置状態までにはいってないと思いますが、多元的に利用されていないという部分は確かなんです。しかも政府も年間の運営計画を打ち出していないし。実際、建設当初は観光スポットとしての価値という部分を考

えながら作っていたんです、このスタジアム。現在はどうでしょう？『鳥の巣』と『ウオーター・キューブ』のように来場した観光客チケットを売っていないですし。」

「メインスタジアムは現在、運営戦略をしっかり練らないといけないと思います。前も言ったように、スポーツ、あるいはスポーツ以外のイベントをどう誘致するか。稼働率をどう上げるか。年間運営計画はとにかく重要なんです。計画の中に、国際イベントの部分と、国内イベントの部分を分けてですね。国際イベントって言っても必ずアジアゲームズみたいな大型イベントじゃなくても全然構わないし、特定競技種目の国際大会で十分だと思います。多くのイベントを開催することで、スタジアムの認知度が上がり、住民もこのスタジアムの存在に連帯感を持つようになれるのです。したがって高雄にイベントを観に来る観光客たちもが地域に経済効果をもたせることが期待できます。いま中国人観光客がたくさん来ているのでしょう？彼らはこのスタジアムまで連れてきて案内できないのか？こういった部分は実に、多くのビジネスチャンスが潜めているのです。」

<u>インタビュイー I-05</u>

「メインスタジアム。誰がそれを運営すべきのか、と。これは簡単な問題なんですよ。一番効率的な組織がやればいいです。民間が効率的だったらやればいいし、できなければ政府がやればいいです。ともにできなければ？第三セクターがやればいいです。決まりがないです。でも今一番問題になっているのは、メインスタジアムの管理費用はものすごく高いです。今の高雄市の自治体の財政的構造では、それをマネジメントするのはとても無理なんです。」

「スタジアムの周辺はあまり商業活動がないですよ。そこで商店街とかを作ってもね、お客は入らないでしょう。まあ立地は悪すぎるのは先天的条件だから。それをどう克服するのか、という問題。たとえスポーツ教室とかをそこでやるとしても、剣道やテコンドーとかを学ばせるために、市街地からそんな遠いところまで子供を通わせるのか、君なら？まあ地下鉄はあるけど、降りてから歩行してさらに 20 分ですよ。だからいろいろ、問題あるんですよ。そうしたらですね、誰がどう運営しても、黒字の見込みは短い期間には絶対にないです、メインスタジアムは。我々が施設の集客について考えるとき、産業の『凝集効果』というのが大事です。メインスタジアムにはそれがないので運営面ではどうしても厳しい。」

<u>インタビュイー　I-06</u>

「スタジアム後続利用というのは、実は高雄が抱えている問題だけではな

くてですね、全世界のスタジアムに共通する問題だと言ってもいいのかな。そもそも大型なスポーツイベントはそれほど多くはないから、大規模なスタジアムをわざわざ建設しても結局そのまま放置してしまうケースが多いのではないか。だから考えないといけないのは、いかにスタジアムの使い方を多くするという部分です。」

インタビュイー　I-08

「今回はそんな大きなスタジアムをただ一つ建設したら、他のスポーツ施設はどうなる？という話ですよ。台湾の、そして高雄のスポーツ環境を整備するには、たった一つのスタジアムでは足りません。極端的に言うと、すべてのお金をそのスタジアムに使っちゃってどうする？という話です。ご存じのように今、メインスタジアムは市政府に大きな負担をかけているのです。そういった課題を解決できない限り、ワールドゲームズが高雄をどうよくしたのかというのは、あとの話だと思います。」

インタビュイー　I-09

「当初、メインスタジアムは 53 億ドルかかりましたね、建設には。その結果、高雄には地域更新に活かせるお金があまり残らなかった事態にもなりました。もともと財政的には余裕があるとは言えない自治体だから、高雄は。ワールドゲームズを機に高雄のインフラを全面的に更新し、高雄の「体質」を変えることができなかったと思います。高雄はどこでも気軽に利用できる施設がある、いつどこでも楽に運動できるスポーツ・シティである、という雰囲気は今、まだ醸し出していないのです。これは今後、高雄が努力すべく方向だと思います。」

インタビュイー　I-10

「今の課題はね、より良いやり方を練りださないと。座席数はどれくらい、3 万 5 千くらいか？覚え間違えていないならそれくらいだな。もし将来、6 万人座席数は必要なイベントを開催すればどうする、また新しいのを作る？あるいはメインスタジアムに臨時的座席を設ける？まあどっちにせよ今のメインスタジアムは、お金遣いというものだ。仕方ない。当初建設まで踏み込んだのは政治的影響なのかどうかという話、今日は寄せましょう。逆に高雄アリーナの方は稼働率が高いよ。他に何があるの、施設は？まあないでしょう。メインスタジアムのレガシーとしての影響は、あまり出てこないと思うけどね。ちょっと残念なところかな。まあ高雄ワールドゲームズって、誘致成功から開催まではたった 5 年間しかなかったでしょ

う。この 5 年間でバタバタといろいろな準備で大変な経験をしてきた分、政府としては施設のイベント後の使い方まで考える余裕はない部分は確かにあると思う。」
「本当はね、1 万 5 千人くらいのスタジアムを作ればいいと思うよ。座席はイベント後にすぐ外しちゃえばいいでしょう。よりによって太陽光発電の装置を屋根全体まで敷いてさ、それじゃスタジアムの改築は困難でしょう。まあデザインは美しいけどね。稼働率はやはり心配の種だよ。後続的なイベントがなければ、放置状態は変わらないし。あれはちょっと残念なところなんだよな。」

多くのインタビューがメインスタジアムのポストイベント運営における問題点を指摘した。まず（1）運営権の帰属が決まらず、イベント後の稼働率が悪く、効率的運営プランを打ち出すことができないことは一番の課題であると考えられる。さらに（2）スタジアムの立地の悪さで周辺では「規模の経済性」が形成されず、スタジアム自体が空洞化し、より広い範囲の地域経済発展にカタリストとして寄与することができない現状も指摘された。（3）年間 8000 万台湾ドル（約 2 億円）を超えるメインスタジアムの管理費用は自治体の財政に莫大な負担をかけていることも課題である。

（2）知識・ノウハウ

2009WG を通して残された知識・ノウハウについては、単なる「保存」にとどまらず、いかに「活用・伝授」するかについて様々な課題がある。

<u>インタビュイー I-04</u>

まぁノウハウといった部分はね、たしかにお宝です。ただしお宝があってもどう使うのかということこそ大事じゃない？今のままでは置きっぱなし

なんだよ。今も山ほどの資料がオフィスで寝ているさ。

インタビュイー　I-07

ワールドゲームズ終了後残ったもの、何かがあると思います？将来また、高雄で大型スポーツイベントを開催することになったらワールドゲームズ以上の出来が期待できると思います？私ならクエスチョンマークをつけますね。なぜならまた、組織委員会を一から作り直さないといけないかもしれないからですよ。これは大問題なんです。すべての知識とノウハウは組織化されていないからです。

インタビュイー I-08

どのようにワールドゲームズのノウハウを活用できるのかについて、個人的な意見ではね、市政府は考えていないと思います。あれはシステム的に伝授しないといけないのにさ、やってないのよ。これじゃ残念なんじゃないの？

インタビュイー　I-09

当初は、ワールドゲームズの経験と知識を伝授する「レガシー教室」を開くべきという声があったのですが、その後やはりやらなかったけどね。

2009WG が一定の知識・ノウハウを残したものの、長期間運用・実行されない場合、次のイベントでは「ゼロからのスタート」になってしまう可能性がある。また、膨大な量の知識・ノウハウの伝授は困難であるとインタビュイーが指摘した。市政府は現在、ノウハウをシステム的に伝授する計画を立てないため、シドニー・オリンピックのように他のイベントへの「知識・ノウハウの輸出」は、当面不可能とされている。

（3）人的資源

人的資源のレガシーの存続に関する課題は主に、フォローアップができるかどうか、ネットワークが形成できるどうかかと、社会資源としての利用策のあり方についてである。

インタビュイー I-05

「ワールドゲームズはすでに終わったイベントなんです。ボランティアが提供すべくサービスもすでに消えました。しかしボランティアの価値、概念、精神といったものはまだ残っているかもしれません。そういうものを第三セクターによりさらにプロモートし、民間に根付けさせるのです。ワールドゲームズが終わってこの二年間はまさに、こういった協働みたいなものが高雄に定着できたと思います。今の課題は、こういった定着したボランティア精神をどうやって他の社会サービスに活用させてもらって、異なる役割を果たしてもらう、ということです。なぜなら毎回毎回大型イベントがあるわけないでしょう。イベントがないときこれらのボランティアは何をすればいいんだ？」

インタビュイー　I-07

「現時点では、ボランティアを効率よくフォローしていくシステムはまだないのです。たとえフォローができたとしても、その対象がまたボランティアを志願するとは限りません。なぜなら台湾人の考えでは、ボランティアをやりたいのは、やはり何かの報酬を得たいというのがモチベーション。そういった部分は外国人とは大違いなんです。これは大きな課題なんです。」

インタビュイー I-10

「今の問題は、これらのボランティアのネットワークはまだ存在しているかどうか、あるいはもう消えたのか。まだ消えていないのなら、次のイベントで再動員するのも簡単だし。今回のイベントはゼロからのスタート。ボランティアを集めて、訓練計画を練って、訓練のスケジュールを立って、最終的に使える戦力になってもらった。この一連のプロセスの中、経験、というものは必ず積み重ねてきたよ。しかしこれらのボランティアは今どこにいるんだ。もう一度イベントを開催すればこれらのボランティアをすぐに集められるか。」

2009WG がボランティア精神を高雄市民に認知させたことが評価されているが、そういったボランティア精神をコミュニティに定着・浸透させられたのかについて、インタビュイーの意見が分かれたのである。しかし、2009WG のボランティアをフォローアップすることが重要な課題であることは一致した。現在、2009WG の人的資源をネットワークとして管理する体系はできていないため、フォローアップは困難な作業であり、これらの人的資源をスポーツ以外の他領域に活用させる方策も掲げられていない。

（4）政策・制度

2009WG の開催がスポーツ政策を中心に、今後の高雄市全体の政策の動きに影響を与えたと確認されたものの、政策の具現化や実行に関する懸念も提起されている。

インタビュイー　I-04

「私には見えませんね。2009 年以降は、ストップという感じですね。本来なら、スポーツ・観光都市の構築などのビジョンをしっかり打ち出すのは筋ですけど、そういった動きは見られない。あと、メインスタジアムを中心に「国家体育センター」の建設も計画されたでしょう？私から見れば、その建設も効率的に行われているとは言えません。当初は体育大学をそこで作るという話もあったでしょう？それもしなかったです。戦略的には、全体的方向性が見えないと言ってもいいかな。」

インタビュイー　I-07

「今回の開催状況を見た限り、「政治がスポーツを主導する」という現象はやはりありました。要はワールドゲームズ開催後に高雄がどういった都市になれるかというビジョンの重要性は、政治のケンカや駆け引きに影を潜

めたというか。これは台湾の政治生態というもので、仕方ないという部分もあります。しかしここで考えられるのは、こういった生態の中、どういった組織がスポーツイベントの主催に適合するという課題。「半官半民」が良いなのか、オール民間主導が良いなのか。開催前から色々な課題を考えて、レガシー・プランの設計を含めた開催計画を練って、持続的にやっていく、ということができる組織とは何か。それも議論できる課題なのではないか。もし今回の経験で、我々がどういった組織パターンが一番台湾に適しているかを見出すことができれば、ワールドゲームズはある意味で良い貢献ができたと思います。」

<u>インタヴュイー　I-09</u>

「我々も、スポーツ・シティを具現化させる戦略についていろいろ提言しましたが、実際のところ、市政府は最初、このようなビジョンをはっきりしていなかったのではないか。その上、自治体再編でやることは山積みだし、財政的には緊迫していますので、「スポーツ・シティ」というスタンスはまだ確立していないです。」

以上の内容から、イベントレガシーの具体的要素とされている「スポーツ・シティ」といったビジョンが具体化されず、自治体が政策制定に向ける動きも緩慢であることが伺える。また、台湾の政治生態がスポーツ施策の制度化・体系化に負の影響を与えてしまうという指摘もあった。2009WG のポストイベント施策の方向性が未だにはっきりしていないと考えられる。

（5）スピリット

2009WG のレガシー具体的構成要素として多くのインタビューに肯定されている「スピリット」ではあるが、「目に見えない」という独特な性質から、評価にあたっての信頼性・妥当性などに関する課題がある想定されている。

インタビュイー　I-06

「ワールドゲームズの開催で「高雄市民でよかった」と誇らしげに言えるようになった住民は多くいますよ。こういった連帯感は都市の発展にとって重要な無形資産だと思います。連帯感を保つには、いろいろな取り組みが必要なんです。スポーツに限らずにね。」

インタビュイー　I-09

「イベントの効果って、量化できない部分は多いです。特に住民の心理的変化と、国際認知度、都市イメージの向上など。もちろんそれは測りにくい部分です。」

2009WG 開催後に住民の連帯感が評価されたものの、そういった連帯感を保つ取組みがされているかは課題となっている。また、「スピリット」を量的に測定しがたいという特性から、レガシーとしての存続方策を打ち出すことも困難であると想定されている。

（6）国際的認知・印象

「スピリット」と同様、国際的認知・印象も無形なレガシーであり、評価にあたって様々な課題が生じるのである。

インタビュイー　I-06

「正直なところ、ワールドゲームズの開催経験があっても、今後の大型スポーツイベント誘致に有利と言い切れることができない。なにせよライバル都市が多いし、それらの都市のスポーツインフラの整備がはるかに進んでいるからです。オリンピックやアジアゲームズのような大型イベントだったら、高雄は誘致しても結局は無理だと思います。インフラ的にも、財政的にもね。」

ここで専門家は、高雄の国際的認知が向上したものの、ライバル都市が多い中、今後の国際スポーツイベントに必ず有利であるとは言い難いと指摘した。

第三節　ポストイベント戦略

（1）施設

メインスタジアムを始め、2009WG の施設が抱えている赤字運営などの課題を解決すべく、専門家が施設のポストイベント戦略について、いろいろ提言した。

インタビュイー I-04

「メインスタジアムは現在、運営戦略をしっかり練らないといけないと思います。前も言ったように、スポーツ、あるいはスポーツ以外のイベントをどう誘致するか。稼働率をどう上げるか。年間運営計画はとにかく重要なんです。計画の中に、国際イベントの部分と、国内イベントの部分を分けてですね。国際イベントって言っても必ずアジアゲームズみたいな大型イベントじゃなくても全然構わないし、特定競技種目の国際大会で十分だと思います。多くのイベントを開催することで、スタジアムの認知度が上がり、住民もこのスタジアムの存在に連帯感を持つようになれるのです。したがって高雄にイベントを観に来る観光客たちもが地域に経済効果をもたせることが期待できます。いま中国人観光客がたくさん来ているのでしょう？彼らはこのスタジアムまで連れてきて案内できないのか？こういった部分は実に、多くのビジネスチャンスが潜めているのです。」

「一番良いのは、専門的な組織を創設し、ワールドゲームズの後続的なプロモーションやレガシーの管理などを一括まとめるという形なのでしょう。中央政府から補助金をもらい、地域の NGO と NPO などを加え、メインスタジアムの年間運営プランをしっかり打ち出して、様々なイベントを開催したりするのは良いのではないか。」

インタビュイー　I-05

「可能な選択肢としては、まぁ今高雄市がすでにやっているのですが、政府と民間による連携なんですよ。最近計画されているのは、メインスタジアムの一部の施設を民間会社に託して運営させることです。このスタジアムはハードウェア—の条件面から見ればすごく優れているので、本当はいろんなイベント開催できます。」

「対策として、全面的な運営設計が必要です。たとえば地下鉄の駅からスタジアムまでのその長くて暗い道を、どう美化させるか？カフェショップとかいっぱい作れば？お客を来てもらうには魅力的な雰囲気をどう作り出すか。クリスマスのときにイルミネーションツアーとか開催したらどうだ。そういった部分は検討できるのではないか。今は空っぽだから、スタジアムまでの道は遠いとしか感じられない。それに、スタジアムの機能性をスポーツに限ってやっていくなら無理だと思います。文化行事なども取り入れないとね。」

「うちの学生は夏休み、メインスタジアムでインターンシップしたけどね、屋根の最上部には遊歩道があるんですよ。そこから眺める高雄の景色は最高でした、と言ってきました。そこをですね、活用できないかなと思います。たとえば観光客にその屋根の上で夜景を見てもらったりして？ははは。全体的の施設をもっとよくして､ね？入場料 100 ドルとか｡記念写真撮影もして、記念グッズも販売したりしてさ。要は高雄ランドマークになってもらうということです。こういうのは全部やれるんですよ。しかし今の問題はやはり、莫大な管理費用にあります。考えられるのは、民間会社や第三セクターによってそのスタジアムの運営を一括でやるという形です。現在では環境的条件はまだ整っていないだけ。」

台湾国内最大級のスポーツ施設であり、2009WG の「有形なレガシー」の一番の目玉として関心を集めながらも稼働率が悪く､「遺産」として機能性を完全に発揮していないメインスタジアムの厳しい現状を打開するため専門家が、様々なポストイベント戦略を提起した。これらの意見を整理してみれば、以下の 2 点に集約できる：(1) 外部委託制度（指定管理者制度と類似）により第三セクターや民間会社でメインスタジアムを運営、(2) スポーツイベントに限らずコンサート・文化イベント・住民イベントの開催や、観光スポットとしての

価値を作り出すなど、など幅広く利用してもらうこと。

（2）知識・ノウハウ

知識・ノウハウを次の大型イベント開催に資することできるレガシーを転化させるため考えられるポストイベント戦略を専門家に調査した。

インタビュイー　I-09

「もちろん一番良いのは、ほらたとえば、『レガシー伝承講座』みたいなものを開いて、国内のスポーツ関係者に我々の今回のやり方を知ってもらうことでしょう。そういった講座を開く予定はあったけどまだ実行していないけど。」

インタビュイー　I-10

「国際大会は多くやったほうがいい。経験を積み重ねるのだ。テスト・イベントというのはあるでしょう。オリンピックや、アジアゲームズの前には必ずやるのだ。目的は、サービス・ファンクションを確認することだ。テスト・イベントは実は大型だよ。たとえば世界陸上とか、世界水泳とか。やり終えたら、どこに問題があるのかを検討する。サービスの提供ルート、ＳＯＰについて問題あるのかを確認し、すぐ調整する。あれはとても重要なんだ。選手を施設に適応させることも可能だし。」

具体的なポストイベント戦略として、「2009 ワールドゲームズ経験伝承講座」を開き、スポーツマネジメント界の有識人士に知識・ノウハウをシェアすることや、多くのイベントを開催することで 2009WG サービス・ファクションを再活用することなど考えられると提起された。

（3）人的資源

2009WG の人的資源のポストイベント活用は、次の国際大型イベントの開催の成功につながる鍵の 1 つと見られている。

インタビュイー　I-04

「これらのボランティアを定期に再教育し、持続的に育成させていく仕組みはどうしても必要だと思います。ワールドゲームズに参与したボランティアは大体、都市に高い連帯感を持っている方なのです。彼らを再利用し、他のイベントに投入させることは重要であると考えられます。ちゃんとしたボランティア組織さえいれば、高雄は台湾においてスポーツイベント誘致・開催の重要な拠点になれるのでしょう。」

インタビュイー　I-06

「ワールドゲームズでは 4000 人以上のボランティアがいました。その中に、300 か 400 人は常勤として参与してきたんですね。これらのボランティアは高雄にとって、お宝のような莫大な資源だと思います。主には、引退した社会人と学生から構成されています。イベントが終わっても彼らの力を借りられるところがあるんですよ。だから自治体の取り組みとしては、データベースを作って彼らの資料を管理するという動きはあるのです。実際に去年から、市政府はすでにボランティア・バンクというのを作っているのです。主にはワールドゲームズで登録したボランティアの基本資料を集めて、そういったデータバンクで集中管理しています。スポーツに限らず、他のイベントにでも運用できますよ、このデータバンク。これさえあれば、将来イベントを開催するとき、このデータバンクからすぐニーズに見合うボランティアを洗い出せるのです。で、すぐ現場に派遣できます。これは自治体にとって大きな資産に間違いないのです。このデータバンクはまだ作っている最中ですが、来年の上半期には完成できます。ワールドゲームズの開催がなければ、こういったボランティア・バンクを作り出すきっかけはないとは思いますけどね。」

2009WG 人的資源のポストイベント戦略として、高雄市政府は 2012 年 7 月ま

でに「ボランティア・バンク」を作り上げる予定。ボランティアのデータを様々なイベントと地域行事に幅広く効率的活用することが狙いである。

（4）政策・制度

イベントレガシーの「具体的構成要素」と「存続における課題」で提起された高雄市の「スポーツ・シティ」の政策構築に関する取り組みは、高雄の 2009WG ポストイベント戦略で非常に重要な一部である。

<u>インタビュイー　I-06</u>

「ポスト・イベント戦略についてはまず、「ノン・オリンピック・イベント」の誘致は重要な方向性だと思います。具体的に言うと、オリンピック、ワールドカップ、アジアゲームズというレベルの大型スポーツイベントではなく、より中型規模のスポーツイベントや、単一種目開催型の国際大会に重点を置きましょう、と。都市規模とインフラ整備の状況から見ると、それは高雄に見合う戦略だと思います。」

「そして、『スポーツ・シティ』を目指して施策を推進することも大事な戦略だと思います。ワールドゲームズが残したメインスタジアム、そしてワールドゲームズ開催で整備されたスポーツ施設を全部合わせたら、高雄は全国で一番、スポーツインフラが充実している都市なんですよ。天候的にも穏やかでスポーツに適しています。それに加えて、『スポーツ重点学校』を選定して競技力の向上を目指すこと。これらの戦略で全国一のスポーツ都市を目指していくのです。実際は現在、市政府は『スポーツ・シティ』の構築を、高雄市全体の施策の一部に入れてやっていますから。

以上話したこれらの戦略において一番のカタリストは、ワールドゲームズに間違いないと言えるのでしょう。」

2011 年 8 月まで高雄市政府のスポーツ局で勤めていたこのインタビュイーは、高雄市が現在（1）中小規模国際スポーツイベントと（2）単一種目国際大会イ

ベントの招致を重点に積極的に立候補する方針を確立していることを明らかにした。工業を産業の中心にしてきた地方都市の高雄が都市再生の新しい方向性を模索している中、2009WG の経験が今後スポーツ政策において可能な発展戦略に寄与したと考えられる。

（5）スピリット

2009WG のレガシーの一部である、住民の高い連帯感と高揚感を保つためのポストイベント戦略について、インタビュイーに調査した。

インタビュイー I-05

「イベントがないときこれらのボランティアは何をすればいいんだ？ここで第三セクターが、ボランティア精神を他の社会サービスに活用させていくのです。」

インタビュイー　I-07

「連帯感というものは消えていくんだよ。ずっとそこに保てるものではない。どうやって保つかというと、それはいろいろやり方あるんですよ。市政府はしっかり考えないと。たとえばスポーツに限らず、もっと広い範囲でイベントを開催すれば？高雄という町が再生に成功したよ、という部分を住民にアピール。そこでワールドゲームズの成果を回顧したりしてさ。我々が言う『内部マーケティング』というものです。そうしたら次のイベントでまた、住民の高い支持を得られるのでしょうけどね。」

インタビュイーの意見から、スピリットを存続させることが簡単ではないと認識できる。ただしポストイベント戦略として、持続的なイベント開催（スポーツイベントに限らず）によって住民の高揚感を再び喚起させる可能性はある

と考えられる。

（6）国際的認知・印象

2009WG は高雄の国際的認知の向上にある程度寄与したと指摘されたが、国際に「高雄—Kaohsiung」という名をアピールする継続的な取組みが無い限り、レガシーとしての価値も消えていく可能性があると考えられる。こういった部分のポストイベント戦略は今後の高雄の国際イベント誘致の成敗につながると考えても良いのであろう。

インタビュイー　I-05

もしも高雄が、こうやっていくつかのイベントを開催してゆっくりと経験を積み重ねるとしたら、将来はきっと様々なイベントを誘致できます。たとえば今回の LPGA 台湾選手権。国際においてもたくさんの人が見ているからね、台湾がスポーツイベントを主催する状況を。そこで良いイメージを残さないといけない。そうしたら台湾と高雄に対して国際社会が信用できるようになるのです。今回 LPGA を開催できるのも、ある程度ワールドゲームズの開催が国際的に良い印象を残しているからと思います。もしワールドゲームズがむちゃくちゃだったら、今年の LPGA も、メジャーリーグの交流試合を手に引き寄せることはてっきり困難だったと考えられます。台湾できるの？と疑問視されるからだよ。だからやはり、積み重ねですよ。現在の世界中では、都市間競争が熾烈なんです。オリンピックの場合、ほら、ロンドン、北京、シドニー…。まあもちろん、いつか台湾にオリンピック開催できるとしたら、それは台北に決まりでしょうけどね。中国に北京、韓国にソウルだからさ。スポーツイベントの誘致と開催は、まさにグローバリゼーションの下に置かれる命題なんです。

専門家は、2011 年台湾で開催された LPGA 台湾選手権とメジャーリーグ交流試合を事例として挙げ、持続的・継続的な国際スポーツイベントの開催を通して高雄の国際的認知度を向上させていくことができると指摘した。本研究のインタビューの内容を、以下の表 4－1 で整理した。

表 4－1　インタビューの内容とカテゴリー

内容 カテゴリー	具体的構成要素	存続における課題	ポストイベント戦略
施設	（1）メインスタジアム「Long Term Stadium」の開催後活用：ワールドゲームズ博物館と見学ルートの設置 （2）メインスタジアムの外部利用：広い芝生と敷地の公園としての機能性で周辺住民の生活の質が向上 （3）グリーン・スタジアム：屋根に設置される太陽光発電装置は年間 110 万ワットを提供できる （4）メインスタジアム以外、他の老朽化したスポーツ施設の国際基準で整備：体育館、水泳プール、スケート場など	（1）メインスタジアムの管理権問題にめぐる中央と自治体のもめ合いで効率的運営ができない （2）年間 8000 万台湾ドル（約 2 億円）を超えるメインスタジアムの管理費用は自治体の財政に莫大な負担をかける （3）周辺の開発が遅れ、「規模の経済性」が形成できない	（1）外部委託制度（指定管理者制度と類似）により第三セクターや民間会社でメインスタジアムを運営（計画中） （2）スポーツイベントに限らずコンサート・文化イベント・住民イベントの開催や、観光スポットとしての価値を作り出すなど、など幅広く利用してもらう
知識・ノウハウ	（1）組織委員会のペーパーワーク：イベント開催の準備に関するＳＯＰ（標準作業手続）の保存 （2）各競技統括団体のマネジメント・マニュアルの保存 （3）サービス・ファンクションのマニュアル →以上は全部、高雄市政府のデータベースで集中管理	（1）長期間運用・実行されない場合、次のイベントでは「ゼロからのスタート」になってしまう可能性がある （2）膨大な量の知識・ノウハウの伝授は困難 （3）シドニー・オリンピックのように他のイベントへの「知識・ウハウの輸出」は、当面不可能	（1）「2009 ワールドゲームズ経験伝承講座」を開き、スポーツマネジメント界の有識人士に知識・ノウハウをシェア（未定
人的資源	（1）自治体・行政部門の人材レガシー：組織委員会に出向いた公務員たちは現在、所属部門でスポーツ施策に尽力 語学人材のレガシー：ＷＧのために訓練された語学人材はイベント後、民間のスポーツマーケティング会社などに就職 （2）教育界の人材レガシー：ＷＧに協力した各級学校の教師の、スポーツに対するに理解が深まった （3）競技統括団体の人材レガシー：ＷＧで器材管理、会場管理に関する知恵を国際競技統括団体から学べた （4）ボランティア：ＷＧの 4,000 人を超えたボランティアは現在、地域行事や福祉活動にも献身	（1）人的資源を統合できるネットワークはできていないため、フォローアップは困難	（1）高雄市政府は 2012 年 7 月までに「ボランティア・バンク」を作り上げる予定。ボランティアのデータを様々なイベントと地域行事に幅広く効率的活用することが狙い
政策・制度	（1）「ノン・オリンピック」というイベント誘致政策の確立：ＷＧ後の高雄の現有資源を見極め、中小規模国際スポーツイベントと単一種目国際大会を中心に誘致。（１）アジアビーチゲームズ、（２）ユースオリンピック、（３）マインドスポーツゲームズ、（４）コンバットゲームズの誘致を現在検討中 （2）「スポーツ・シティ」というビジョンは、高雄市の全体施策のブループリントに取り入れられた	（1）「スポーツ・シティ」の構築戦略は現在具体化されず、施策の制定に向けて自治体側の動きも緩慢	（1）中小規模国際スポーツイベントと単一種目国際大会イベントの誘致に積極的に立候補 （2）学者とスポーツ有識者を中心に「スポーツ・シティ戦略評議会」を開き、具体的施策を議論を通して策定（未定）
スピリット	（1）WG の「お祝いモード」により、住民の連帯感が高揚 （2）住民の公共事務への関心・参加は増えた傾向 （3）住民のスポーツに対する関心が向上 （4）「大型イベントをこれからもどんどん高雄に」という、住民のスポーツイベント開催への理解と熱意	（1）住民の連帯感をどう活かすか？どう持続させるか？自治体側の戦略は見えない （2）公共事務参加・スポーツ参加の増加には、量的検証が必要	（1）地域に密着する、定期的なイベント（スポーツ・芸術・アート・民俗行事など）を年間に通じて開催。
国際的認知・印象	（1）WG の開催は、「KAOHSIUNG」の名を国際スポーツ界の有力者に知らせた（例：ＩＷＧＡ会長は現在、アジアビーチゲームズの高雄開催を支持し、関係者を遊説中）。今後のスポーツイベント誘致には有利 （2）市政府の調査によると、海外観光客の高雄に対する好感度は向上した（調査した 33 名の中 30 名が再訪問意図あり）	（1）「国際的イメージアップ」を精確的に測定することは困難 （2）好感度向上≠観光効果？ （3）WG 開催期間中、海外観光客に大規模な調査を行わなかったため、ツーリスト・データベースを作る機会を失った	（1）ＷＧの開催成果をまとめたレポートを国際スポーツ関係者に配布、イベント開催の実力をアピール

第四節　考察

以上、第一節～第三節においては本研究の結果として、2009WG のレガシーに関して、(1) 具体的構成要素 (2) 存続における課題 (3) ポストイベント戦略に分類してまとめたが、全体的・総合的な考察は本節で行う。

(1) 2009WG のレガシーの具体的構成要素

改めて整理すると、2009WG 開催には (1) 都市再生に資するカタリストとして地域活性化への寄与、(2) 高雄の国際知名度の向上、と 2 つの目標を掲げられていた。我々が 2009WG のレガシー検証する際も、この 2 つの目標が実現されているかに注目しなければならない。

まずは地域活性化についてである。「地域活性化」はレガシーと同様、定義が曖昧な概念であるが、木田 (2007) が、スポーツイベントを活用した地域活性化を図っていくうえの留意点をいくつか挙げた：(1) 行政が主体的に行うスポーツイベントの開催目的・意義を明確にするとともに、開催にあたっては、それらを広く住民に告知し、賛同を得る必要がある、(2) スポーツイベントにボランティアとして多くの住民に参加してもらえるような仕組みを整備し、住民主体のイベントとしていくことが重要である、(3) 事後の効果を十分に検討していく (効果が継続可能である社会的効果についてはそれをベースに経済的効果発揮につながる施策展開、あるいは更なる社会的効果発揮に向けた施策展開などを効果的実施していくこと重要である)。2009WG の場合は、インタビュー

によれば、当初、資金調達の困難といった事情で組織委員会が忙殺され、明確的な開催意義・ビジョンなど考える余裕がなかったことが明らかである。

インタビュアー　(筆者)

高雄ワールドゲームズは開催当初、レガシー・プランについてまったく考えていなかったと言ってもいいでしょうか？

インタビュイー　I-07

その通りですね。まぁこんな大型イベント開催は初めて、というのも原因だけどね。しかし当初は組織委員会が海外考察をいっぱい行ったのにレガシーについて考慮しなかったのはどういうことだ、とも思いますね。まぁ残念ですね。台湾は人材がいないわけではないですよ。本当はいっぱいいます。しかしこれらの人材は、官僚体系に制限されてしまったわけです。やりたいことを存分にやれないというのは現実。当時はワールドゲームズにスポンサー資金を投入したい企業は本当はたくさんあったけどね。しかし費用対効果と法律の制限などを考えてみたら、やはり片っ端から撤退したのですよ、それらの企業。要は今の台湾では、イベント関連の民間投資環境はまだ整っていないということ。資金の調達も困難だし、後続的な経済効果もあまり見込めない。今後は大型スポーツイベントを開催しようとしてもやはり、政府の資金に頼ることになるんですけどね。これらのことは最初からじっくり考えないといけないはずなのにね。

2009WG は最初、「トップダウン」といった形な開催形式で、行政主導の色が濃かったことが否定できない。多くの（極端と言えばほとんどの）住民はイベント前、ワールドゲームズの開催理念をともかく、競技種目さえ知らなかった。大会開始後メディアの報道や台湾人選手のメダルラッシュによって住民の関心が上昇し、最終的に 2009WG の成功は「市民の誇り」になったという経緯があったと筆者が観察できた。つまり 2009WG は「住民主体のイベント」というより、「行政主体」で住民を巻き込むといった色が濃かったと考えられるのではな

いか。また、ワールドゲームズが重視する「多くの住民に参加してもらえるような仕組み」については、ボランティア精神のプロモートや住民動員などによって、2009WG では多少の成果を上げた。最後、本研究が一番注目する「事後の効果を十分に検討していく」といった部分について、高雄市政府は「2009 ワールドゲームズが高雄市の全体的発展にもたらす影響に関する調査」といったレポートを作成し、ボランティア・バンクを立ち上げる以外、他の検討策がほとんど見られないのは否定できない事実であろう。

総括的に言うと、2009WG は（1）グリーン・メインスタジアム（施設）、（2）ボランティア・バンク（人的資源）、（3）大型イベントの SOP（知識・ノウハウ）、（4）中小規模国際スポーツイベントと単一種目国際大会を中心に誘致（政策・制度）、（5）住民の高い連帯感（スピリット）、（6）国際スポーツ界における高雄の知名度の向上（国際的認知・印象）などの具体的レガシーを残したものの、これらのレガシーの存続における課題も懸念されている。MacRury(2009)によれば、スポーツイベントの主催側は、誘致段階からレガシープランを明確的に打ち出し､ポストイベント戦略を含める全体的ビジョンを示すべきである。本研究のインタビュイーI-07 の話によれば、2009WG の主催側は事前にレガシー・プランの作成に余裕のなかった状態にあり、急ピッチで開催を進めたという。こういった状況では、イベントの成果を住民全体に共有し、行政・住民側・民間企業が共同体になり、イベントレガシーの存続に尽力することも困難になるのが想定できるのであろう。

現代のスポーツイベントでは、特にオリンピックの場合、誘致当時から長期的なレガシープランを提出しなければならない。イベントの開催が都市・国あるいは世界中にどのような貢献をもたらすことを最初から計画的に練り上げらなければならない。このような視点から評価すると、2009WG のプレイベント計画ではレガシーに関する概念が一切提起されなかったのは極めて残念なことである。Peuess（2007）によると、レガシーは計画的（planned）と非計画的（unplanned）の二種類に分けることができ、非計画的なレガシー主催側の事前の戦略による生成するものではなく、ある程度「予想外」なものであり、マネジメントは比較的に難しいのであり、短期間で消える可能性もあるとされている。誘致・準備段階でレガシープランが確立されなかったため、2009WG のレガシーはまさに計画的に形成されたものではない、いわゆる「非計画的なレガシー」である。そのため、レガシーを活用し、存続させるポストイベント戦略もシステム的に構築されていないといったのが現状である。

（2）レガシーの存続における課題

2009WG のレガシーにおける存続課題は、「山ほど」といった表現を使用してもではないほど存在している。（1）メインスタジアムなどの施設のさらなる活用・効率的運営に立ち向かう窮境、（2）運用されていない知識・ノウハウ、（3）確実に存在しているが整合の取組みが見られていない人的資源、（4）ビジョンはあるが具体化まで時間がどれほどかかるかまだ不透明なスポーツ施策変革、

無形のレガシーであるためプロモートと保存が困難な（5）スピリットと（6）国際的認知・印象。専門家が提起したこれらの課題を打開するためのポストイベント戦略は、2009WG に限らず、他の大型スポーツイベントにも寄与できるのではないかと考えられる。

（3）ポストイベント戦略

インタビュイーが提起したポストイベント戦略の中、すでに実行段階に入る戦略もあるが、構想段階にとどまる提案もある。

まず、（1）施設のポストイベント戦略から検討する。注目すべきのが、外部委託制度について複数のインタビュイーが言及したことである。日本の「指定管理者制度」に類似するこの制度は、公的体系でうまく活用されていない施設を民間の知恵と黒字計上を目標とする運営手法によりスポーツ施設の再生と効率的運営に貢献できる。台湾では指定管理者制度がないが、メインスタジアムの苦境を打開するには、第三セクターによる委外経営（外部民間団体に運営権を委託する法令）を通して全面的運営プランの立ち上げは唯一の活路であると専門家たちの意見が一致した。また、「スポーツ施設はスポーツイベントをやるべき」といった陳腐な観念を捨て、より多様化なイベントと行事によりメインスタジアムを活性化させることが上策であると指摘された。

（2）知識・ノウハウや（3）人的資源について、現段階では市政府が具体的な動きがない限り、統合的運用が困難であるが、2009WG レガシーを一括管理

する専門単位の創設は考えられる。

（5）スピリット、（6）国際的認知・印象については、自治体だけではなく、中央政府との連携により様々なプログラムの推進でさらなる成果が挙げられると考えられる。また、民間組織、また第三セクターによるこれらのレガシーのマネジメントと活用も期待されている

（4）の制度・政策に関するポストイベント戦略について特筆する必要があると考えられる。2009WG 後、高雄市の行政側では、高雄の現有の資源を見極め、今後は①単一種目国際大会、②比較的に中小規模な大会を誘致する方向性が確立された。世界中の「スポーツイベント誘致合戦」における、オリンピックや FIFA ワールドカップなど超大型スポーツイベントを当面誘致不可能な地方都市とスポーツ途上都市に、1 つの可能な方向性を示唆するのであると考えられる。

<u>インタビュイー　I-06</u>

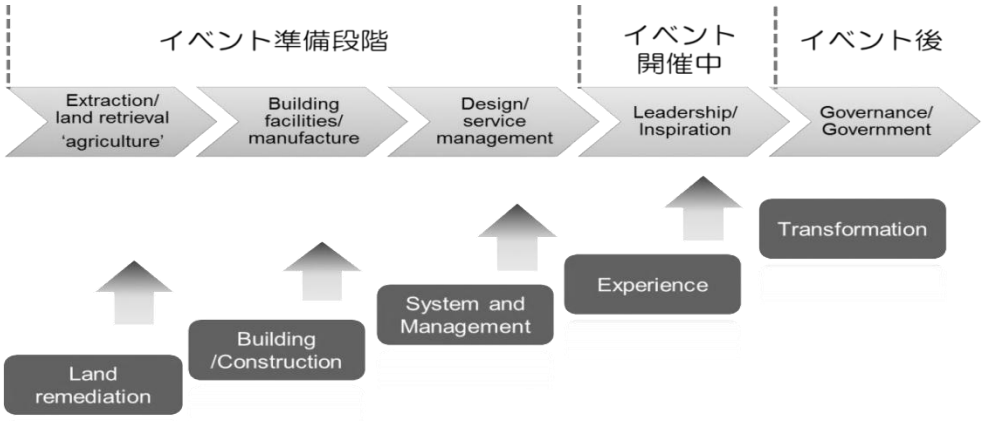
「オリンピック、ワールドカップ、アジアゲームズというレベルの大型スポーツイベントではなく、より中型規模のスポーツイベントや、単一種目開催型の国際大会に重点を置きましょう、と。都市規模とインフラ整備の状況から見ると、それは高雄に見合う戦略だと思います。」

こういった新たな施設を作らず（もしくは臨時的施設で開催）、現有資源・施設を最大限に活かすという、「都市の身の丈」に合う招致戦略は都市にとって、（1）イベント開催で都市が莫大な借金を抱える事態を免れる確率が高い、（2）

より多くのイベントを誘致・開催することが可能になり、そういった一連のイベント開催を通してハードウェア（国際基準に満たす施設の整備）とソフトウェア（人的資源・知識・ノウハウなどの蓄積）における質量の向上に一定な成果を挙げる可能性が高いと考えられる。オリンピックみたいなビッグ・スケールなイベントに限らず、単一種目国際大会と中小規模国際大会にも地域と開催都市に予想外な効果とレガシーをもたらす可能性を秘めていると本研究が提起したい。

ただし残念なことではあるが、高雄市政府は誘致当初から、長期的視座を据えてレガシープランを打ち出すことがなかったため、イベント後に「突如」に現れたレガシーについて体系的なマネジメントと存続方策を立てることができないのは事実である。そのため、「スポーツ・シティ」の構築、スポーツイベント誘致の方向性とボランティア・バンクの創設は政策として実行段階に入った以外、他のポストイベント戦略は専門家の「提言」にすぎないのは現状である。この事態から、我々は改めてイベントの全てのステークホルダー（国・自治体・民間団体・一般住民）による「誘致段階からのレガシープラン」の立ち上げの重要性について訴えたいと考える。

図 4-1　ロンドン・オリンピックのレガシープラン



出典：MacRury(2009). "London's Olympic Legacy" p.90. 一部加筆

ロンドン・オリンピックは、イースト・ロンドンの土地・産業・不動産の開発と再生を主眼に、組織委員会が招致当初からレガシープランを打ち出している（図 4－1)。スポーツイベントは、こういった 10 数年後の都市未来像を据えるビジョン、およびイベントと連動する一連な施策プロセスが計画されない限り、レガシーの存続もポストイベント戦略も清楚なビジョンと具体方策が欠如し、そして実行の人材が流失し、2009WG のように様々な課題が発生する恐れがあると本研究が指摘したい。

しかし、本研究で提起された「都市の身の丈に合った招致戦略」は今後のスポーツイベント誘致には有用な提言であると考えられる。オリンピックや FIFA ワールドカップなどの大型イベントが脚光を浴びる中、世界各地では実際、数多くのスポーツイベントが開催されている。中には観戦型イベントだけではなく、参加型イベント（マラソン・トライアスロンなど）の盛んな開催も新たな

潮流としてブームを起こしている。これらの中小型イベントを地域のカタリストとしてうまく運用でき、イベントごとにレガシープランを的確に打ち出せる場合、多額な開催資金をかけなくても一定の地域活性化効果や都市宣伝に寄与できると考えられる。商業化・肥大化する一方のオリンピックと FIFA ワールドカップなどの大型イベントがスポーツ界を君臨する中、我々は今後、都市とスポーツイベント開催のウィンウィン関係の創出について改めて考えなければならない。

第五章　研究の限界と課題

第一節　一般化に関する課題

本研究は、(1) スポーツイベントのレガシーの定義を明確化し、その定義を用いて、2009WG を都市再生の一つのカタリストとして捉えた上、イベントが開催都市(高雄市)にもたらすレガシーの具体的構成要素を検証すること、(2) それらのレガシーが地域発展・活性化に持続的に寄与しているかを検証し、さらにレガシーの存続に関する課題を見出し、国際スポーツイベントの開催都市が取り組むべきポストイベント戦略を検討すること、2 つの研究目を基づいて研究をデザインし、インタビュー調査を通して 2009WG のレガシーについて調査したが、本研究は単一事例の調査であるのは否めない。実際、先行研究を通して、世界中のスポーツイベントはそれぞれ、異なるレガシーをもたらすことが分かる。そのため本研究が提起したレガシー・カテゴリーとポストイベント戦略は高雄という台湾の地方都市の現状と事情に照準するものであり、すべてのスポーツイベントに適用するものではない。

ただしこういった実態も、今後のイベントレガシーといった研究分野において、柔軟的かつ幅広い視野であらゆる現象を捉える必要があることを提示したのではないかと考えられる。イベントレガシーの研究アプローチを一般化することは短期間において極めて困難な作業であるが、事例研究を積み重ねることによって、学術界がより適用できる手法を見出すのであろうと考えられる。

第二節　インタビュイー構成の課題

本研究は、高雄市政府自治体側のスポーツ部署の担当者に対し調査を行う予定もあったが、最終的にはスポーツビジネス界の学者を中心にインタビュー調査を行った。インタビュイーの 10 人のうち、2009WG の開催に実際携わった学者は 2 人しかいない。学者中心の調査結果は客観性を確保できたが、自治体側の意見を得られなかったことで、実際存在するかもしれないレガシーや取り組んでいるポスト・イベント戦略を見逃す可能性があると否定できない。今後イベントレガシーに関する研究を取り組む際、自治体側の意見と学術界の意見を同時に聴取し、比較的に中立した結果をどのように引き出すかといった部分は課題とされるのであろう。

第三節　調査手法における課題

より柔軟的かつ広い視点で 2009WG のイベントレガシーの全体像を捉えるため、本研究が質的研究法を採用した。ただし、高雄市政府の研究レポート「2009 ワールドゲームズが高雄市の全体的発展にもたらす影響に関する調査」のように、量的指標と質的データを併用する調査手法もある。現段階では、経済効果の計算モデル以外、イベントレガシーを評価する量的指標は確立されていないが、より全面的レガシーを調査するには、信憑性のある量的指標の設計は望ましいと考えられる。

第四節　まとめ・今後の可能性

本研究は、スポーツイベントのレガシーをカテゴリー化した上、調査する 1 つの方向性を提供した。また、イベントレガシーの存続における課題を打開し、レガシーを地域活性化により一層寄与できる「起爆剤」に転化させていくポストイベント戦略の提言も行った。イベントレガシーは新興の研究分野であり、知の蓄積と研究数量についてはまだ「途上」とは言えるが、今後も激化していくと見られる世界中の「スポーツイベント誘致・開催合戦」において、レガシーの継続的創出と評価は重要な課題となっていくと考えられる。そのため、レガシーに関する研究のより多い取組みが期待されるのであろう。

また、本研究の重要なポイントとして、地方都市がスポーツイベントのレガシーを活用するあり方について多く言及した。ビッグ・シティ以外、数多くの地方都市（もしくはスポーツ途上都市）がどのような規模・性質のスポーツイベントを誘致し、それらイベントの開催をどのように地域活性化の鍵に転化させていくかについては、今後注目すべき部分であると考えられる。

参考文献

Allen, L. R., Hafer, H. R., Long, R. and Perdue, R. R. (1993). Rural Residents' Attitudes Towards Recreation and Tourism Development. Journal of Travel Research, 31(4), 27-33.

Andriotis, K. and Vaughan, R. D. (2003). Urban Residents' Attitude Toward Tourism Development: The Case of Crete. Journal of Travel Research, 42, pp.72-185.

Ap, J. and Crompton, J. L. (1998). Developing and Testing a Tourism Impact Scale. *Journal of Travel Research, 37*, pp. 122-130.

Brougham, J. E. and Bulter, R. W. (1981). A Segmentation Analysis of Resident Attitudes to the Social Impact of Tourism. *Annuals of Tourism Research, 8(4)*, 569-586,

Chalkey (2006). *The economic impact of major sports events: a review of ten events in the UK*, p3. London: Routledge.

Crompton, J. L. (1995). Economic Impact Analysis of Sport Facilities and Events: Eleven Sourses of Misapplication. *Journal of Sport Management, 9(1*): 14-35.

Bogner, A. and Menz, W. (2002). Das theoriegenerierende Experteninterview-Erkenntnisintersse, Wissensform, Interaktion. In A. Bogner, B. Littig and W. Menz (eds.), *Das Experteninterview-Theorie, Methode, Anwendung*. Opladen: Leske and Budrich. pp.33-70.

Flick, U. (2011). 質的研究入門. 小田博志監訳. 東京, 春秋社.

Getz, D. (1997). *Event Management and Event Tourism*. New York: Cognizant Communication.

Glaser, B. G. and Strauss, A. L. (1967). *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qulitative Research*. New York: Aldine.

Gratton, C. (2001). Role of Major Sport Event in the Wconomic Regeneration of Cities. In *Sport in the City*, pp. 39.

Hall (1992). *Hallmark Tourist Events: Impacts, Management and Plannig*. London: Belhaven Press.

Johnson, J. D., Snepenger, D. J. and Akis, S. (1994). Residents' Perceptions of Tourism Development. *Annuals of Tourism Research, 21(3),* 629-642.

Kang, J. H. (2006). Maga Sport Event and Building Legacies: The Cases of the 1988 Seoul Olympic Games and the 2002 FIFA World Cup Korea/Japan. Asian Association of Sport Management 2006 Annual Proceedings. pp.44-65.

Ko, D. W. and Stewart, W. P. (2002). A Structual Equation Model of Residents' Attitudes for Tourism Development. *Tourism Managemnet, 23,* pp.521-530.

Kohli, M. (1978). 'Offense' und 'geschlossens' Interview: Neue Argumente zu einer alten Kontroverse. *Soziale Welt*, 9, 1-25.

Liu, J. C. and Var, T. (1986). Resident Attitudes Towards Tourism Impacts in Hawaii. *Annuals of Tourism Research*, 13, 193-214.

MacRury, I. (2009). London's Olympic Legacy. London East Research Institute.

Meuser, M. and Nagel, U. (2002). Expert Inneninterviews- viefach erprobt, wenig bedacht. Ein Beitrag zur qualitativen Methodendiskussion. In A. Bogner, B. Littig and W. Menz (eds.), *Das Experteninterview. Opladen: Westdeutscher Verlag*. pp. 441-468.

Mihalik , B.J. and Cummings, P. (1995). Host Perceptions of the 1996 Atlanta Olympics: Support, Attendance, Benefits and Public Policies. Travel and Tourism Research Association 26th Annual Proceedings. (pp. 397-400).

Mihalik , B.J. and Simonette, L. (1998). Resident Perceptions of the 1996 Summer Olympic Games- Year Ⅱ. *Festival Management and Event Tourism, 5(1*), 9-19.

Mules, T and Faukner , B. (1996). An Economic Perspective on Major Events. *Tourism Economics, 12(2).*

Oxford English Dictionary (2006). 'Legacy'. http://www.oed.com/view/Entry/107006?rskey=648mPG&result=1&isAdvanced=false#eid

Preuss, H. (2006). Lasting Effects of Major Sporting Events. Institute of Sport Science. Published by Johannes Gutenburg University Mainz, Germany.

Preuss, H. (2007). The Conceptualisation and Measurement of Maga Sport Event Legacies. *Journal of Sport and Tourism, 12(3-4)*, pp. 207-227.

Ritchie, J. R. B. and Aitken, C. E. (1984). Assessing the impacts of the 1988 Olympic Winter Games: the Research Program and Initial Resaults. *Journal of Travel*

Research, 22(3), 17-25.

大谷尚（2007）． 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き．名古屋大学大学院教発達科学研究科紀要，54(2).

大谷尚（2007）．SCAT: Steps for Coding and Theorization：明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学, 10(3).

上條典夫 (2008). スポーツ経済効果で元気になった街と国． 講談社新書.

観光庁（2010）．スポーツツーリズム連携推進会議配布資料.

木田悟（2006）． スポーツイベントを活かした地域振興方策． 日刊自治ファーラム, 559, pp.10-17.

師岡文男 (2009). 第 8 回ワールドゲームズの成果と課題. 上智大学体育 (43), 33-39.

西原康行，佐藤勝弘 （2004）．ワールドカップ新潟開催における住民の意識変容：開催後の意識安定化までの時系列的研究．新潟医福誌, 4(1), 37-47.

原田宗彦 （2002）．スポーツイベントの経済学：メガイベントとホームチームが都市を変える．平凡社新書.

原田宗彦 （2008）.「メガ・スポーツイベントと経済効果：数字に潜む問題点」. 都市問題研究，60(11).

堀繁，木田悟，薄井充裕 （2007）. スポーツで地域をつくる. 東京大学出版会.

高雄市議會(2009). 「世運過後，高雄市要做什麼」公聽會錄音紀錄. **高雄市議會**

公報, 56(10).

高雄市政府(2009). 2009 高雄世運會開幕以來獲極高的評價. **高雄世界運動會官方網站**: http://www.worldgames2009.tw/wg2009/cht/content_j.php?a_id=63

高雄市政府(2010). 2009 世運會對高雄市整體社會發展影響之研究. **高雄市政府研究發展考核委員會委託研究.**

趙天麟 (2007). 大型運動賽事辦理模式與城市發展關連性之研究. **國立中山大學高階公共政策碩士班碩士論文.**

付録　インタビューガイド

レガシーに関するインタビューガイド （Kang, 2006 による作成）

		レガシーの分析視点		
レガシーの側面		都市・国家	スポーツ	観光
①	都市構造	◆都市の構造的変革		
②	インフラ	◆インフラ建設・道路・鉄道・空港・大衆交通システム・電気設備・通信システム・下水道・公園など	◆スポーツインフラ・スポーツ施設・訓練施設など	◆観光インフラ・旅館・ショッピングエリア・文化的名所・エンターテインメント施設など
③	知識・インフォメーション	◆イベントをサポートするためのノウハウとインフォメーション	◆イベント誘致・開催のノウハウとインフォメーション	◆観光コンテンツ・インフォメーションなど
④	人的資源・ネットワーク	◆イベントをサポートするための人的資源とネットワーク	◆イベント誘致・開催の人的資源	◆観光の人的資源
			◆スポーツ産業とスポーツ団体とのつながり	◆観光領域におけるローカルとグローバルのネットワーク
⑤	シンボル	◆都市と国のイメージとブランド	◆スポーツに関するイメージ	◆デスティネーション・イメージとブランド
		◆歴史・記憶		
⑥	社会文化	◆プライドとスピリット	◆スポーツ参与	◆観光の文化的基盤
		◆社交・交流		◆観光デスティネーションの一員として地域住民のアイデンティテの向上
		◆シチズンシップ		
		◆イベント参与		
		◆国際的文化		
⑦	経済	◆一過性の経済効果ではなく、持続的な経済的影響	◆スポーツイベントに関わる諸産業の発展：スポーツマーケティング・エージェントサービス・スポーツメディア・スポーツ用品・e スポーツ・スポーツスポンサーシップ・スポーツライセンシング	◆観光産業の量的成長
		◆他の産業の成長		◆観光サービスの質的向上
				◆観光産業の構造化
⑧	制度	◆行政組織の再編成	◆スポーツ組織の行政システムの更新・再編成	◆観光管理相関システム・法律・施策の制定
		◆中央政府とのより深い関係		
		◆行政システム・法律・政策の更新		
		◆環境政策・法律の更新		

謝　辞

大学院生活の 2 年間、様々なことがありました。写真撮影や旅行で日本を満喫して楽しかった時期があれば、留学をやめたいほど心が折れそうになって、自分と闘い続ける苦しい時期もありました。しかし、支えて下さった人々がいました。この 2 ページの謝辞では私の感謝の気持ちを万分の一も伝えきれません。けれど、出来る限り伝えたいと思います。

2 年間、貴重なご指導くださった原田宗彦先生、本当にありがとうございました。不器用で心配性な私の能力を認め、就職先までご紹介くださって、研究だけではなく生活面にもいろいろご関心くださった先生に感謝します。また、論文の副査を快諾してくださった木村和彦先生と作野誠一先生、留学生活の大変さをいつもご理解・ご関心くださっている松岡宏高先生と、学部生時代の恩師であり、私が来日してもお世話し続けていた国立台湾体育大学の葉公鼎先生に感謝したいと思います。

本論文のインタビュー調査にあたって、ご多忙の中ご協力くださり、未熟な私に貴重なご意見をくださった台湾の先生達に、心より感謝を申し上げます。

博士課程の石井十郎さん、吉倉秀和さん、押見大地さん、松井くるみさん、柴田恵理香さん、2010 年度修士課程修了の丸朋子さん、小島勇介さん、宇野冠章さん、宮杉理紗さん、浅野泰弘さん、そして外国人研究員の金智英さん、いつも留学生の私を優しくご面倒みてくださって、ありがとうございました。くるみさん、こんな事務局員で申し訳ありませんでした。でも本当に、いろいろありがとうございました。これからも頑張ります。

同期の M2 の仲間。あなた達は最高でした。ドＳでおしゃべりで、いつもうるさいけど優しい思いやりもある中司雄基君､あの中華料理の夜はありがとう。鹿屋同士でいじりやすく、リアクションも面白い渡邉健君。いつも的確なアドバイスとつっこみ、そして人一倍の関心をくれていた渡邊みさとさん。神秘感が溢れるが本当は優しい心の持ち主の荒井勇気君。研究室の席のワイトボードにいつも素晴らしい絵を描いてくれた本目みほさん。マイペースながら人生にこだわりがあって、尊敬できるところが多い上政頼昌弘君。キャッチボール仲間で、私がつらい時期にいろいろ助けてくれた橋本拓哉君、2 回も起こった例のアクシデントで面倒みてくれて本当にありがとう。あなた達と一緒に戦うことができるのは幸せでした。これからも各自の世界で、未来に向けて頑張りましょう。

後輩だけど私を先輩扱いせず、いつも気軽に笑い話や英会話を持ってきてくれて、気持ちを和らいでくれた M1 の皆様、山下玲さん、飯塚啓太君、兵頭陽君、田中いづみさん、新井萌さん、ありがとうございました。I really love you guys!

留学生の先輩であり、人生の先輩でもある楊雅婷さんと劉暢さん、私が大変な時期にいつも支えてくれてありがとうございました。君達と行ったカラオケはこの 2 年間で最高のストレス発散でした。

学生相談室の立崎先生、1 年間のカウンセリング本当に助けてくれました。私の悩みにいつも温かく耳を傾けて下さってありがとうございました。

台湾にいながら遠くから声援を送ってくれてきた友達にも感謝したいと思います。陳俐如さん、劉芳瑜さん、李郁芳さん、簡晨宇さん、陳彦霖さん、陳婷妮さん、林昭任君、そして高校時代の恩師である劉慧君先生。私の背中を押してくれてありがとう。あなた達の期待と応援を、絶対裏切りません。

日本で一番の大親友の、成田好さん。いつでもどこでもこんな私をサポートし、笑顔で応援してくれて、ありがとう。

最後に、私のことを一番わかっていて、人生の一番つらいときに温かく支えてくれた家族に最大限の感謝を伝えたいと思います。姉ちゃん、妹、そしていつでも一番心強いパートナーであるお母さん。君達がいなければ、私は絶対、ここまで来られませんでした。ありがとう。

天国にいるお父さんへ。修士号を取った晴れ姿、本当はお父さんにも見せたかった。21 年間ありがとう。これからは家族を守って、お父さんの分も頑張って生きていきます。

私は幸せ者です。壁にぶつかったことさえ、私が恵まれている確証です。なぜなら私はそれで大きく成長したからです。早稲田で過ごしたこの 2 年間の大学院生活は、私の一生の宝物です。

皆様、本当にありがとうございました。

平成 24 年 2 月 23 日

李 芝菁